【Part.1】小さなまち旅～モノ・ヒト・コト～

第１章　筆者の「小さなまち旅」の系譜

１　筆者の旅の系譜

（１）これまでの旅の整理

筆者は大学時代から町並みや建築物に興味を持ち、多くの地域、集落、歴史的町並み、歴史的建造物、現代建築等を見て回った。

１ページの「はじめに（研究の目的）」の中で少し触れているが、筆者の旅は大きく次の５つの時代に区分される。具体的には、建築と出会った熊本での「①学生時代」、初めて就職した東京での「②会社員時代」、福岡に戻り福岡市役所に入庁し、主に景観形成や広域連携の業務に興味を持った「③公務員時代Ⅰ」、そして福岡市役所での業務を地域活動に活かしたいと思い、まちづくり活動を実践してきた「④公務員時代Ⅱ（唐津街道姪浜まちづくり協議会活動時代）」、さらには自分自身をステップアップするために新たな旅に取り組んでいる「⑤公務員時代Ⅲ～現在（地域づくりを巡る小さなまち旅実践時代）」である。

各時代の環境の変化、それに伴う筆者自身の興味や活動の変化等に伴い、それぞれの時代にテーマを持って旅に取り組んできた。これらに共通しているテーマは、各地域固有の歴史・文化・風土を活かした景観づくりと地域づくりの取り組みである。

なお、次ページ以降の旅の振り返り部分については、2016 年度の「身近な地域資源を活かしたまちづくり活動記録～姪浜での 10 年の実践活動を中心とした、建築と地域づくりへの想い」及び 2017 年度の「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究～姪浜でのまちづくり活動と地域づくりを巡る小さなまち旅を通して～」を一部加筆修正している。

筆者の旅の整理

時代区分	時期	旅のテーマ
①学生時代	1976.4～1980.3 熊本大学時代	■建築を巡る旅（主に現代建築）
②会社員時代	1980.4～1986.3 鴻池組時代	■建築を巡る旅（現代建築、歴史的建造物） ■歴史的町並みや庭園を巡る旅
③公務員時代Ⅰ	1986.4～2007.2 福岡市役所時代Ⅰ	■歴史的町並みを巡る旅 ■都市デザインを巡る旅
④公務員時代Ⅱ	2007.3～2016.5 福岡市役所時代Ⅱ（唐津街道姪浜まちづくり協議会活動時代）	■地域主体の景観づくりや地域づくりを巡る旅
⑤公務員時代Ⅲ～現在	2016.6～ 福岡市役所時代Ⅲ～現在（地域づくりを巡る小さなまち旅実践時代）	■地域づくりや建築の原点に返る旅 ■熊本の復興の過程を巡る旅 ■身近なまち旅

また、次ページは筆者の旅の系譜（概要）である。筆者の旅に影響を与えた主な出来事を、筆者自身の年表、旅に関する動向、印象に残る建築物や町並み等により整理している。

「参考資料１　筆者の旅の系譜」

筆者の旅の系譜（概要）

		年齢	筆者の旅に影響を与えた主な出来事	
			筆者自身の年表	旅に関する動向● 印象に残る建築物、町並み等▲
①学生時代		18 22	1976.4 熊本大学建築学科入学 ■建築との出会い ■建築巡り ■卒業論文（三角西港）＆ 卒業設計（Architectural Complex） 1980.3 熊本大学卒業	●山口百恵「いい日旅立ち」 （国鉄ｷｬﾝﾍﾟｰﾝ） ▲九州の現代建築 （磯崎新、黒川紀章、白井晟一） ▲熊本の歴史的建造物の保存運動 （木島安史、長谷川堯） ▲孤風院（木島安史） ▲旧帝国ホテル（ﾌﾗﾝｸ・ﾛｲﾄﾞ・ﾗｲﾄ）
②会社員時代		22 28	1980.4 鴻池組入社（東京本店設計部） ■建築巡り ■歴史的建造物への興味 ■歴史的町並みへの興味 ■最初の海外建築旅行 1986.2 鴻池組退社	▲現代建築（村野藤吾、内井昭蔵） ▲寺社等（桂離宮、修学院離宮、円通寺、薬師寺、室生寺、伊勢神宮） ▲近代建築（中京郵便局、東京駅） ▲歴史的町並み（川越、栃木、倉敷） ▲海外の古典建築（ｷﾞﾘｼｬ、ｲﾀﾘｱ、ｴｼﾞﾌﾟﾄ）
公務員時代（福岡市役所時代）	③公務員時代Ⅰ	28 49	1986.4 福岡市役所入庁 1993.4 都市景観室配属 ■景観形成地区の指定 ■海外派遣研修 2000.4 福岡都市科学研究所配属 ■研究「広域連携」 ■国内外都市調査	▲歴史的町並み（金沢、京都、奈良） ▲アーバンデザイン（横浜、神戸、ﾊﾟﾘ、ﾍﾞﾙﾘﾝ、ｼｭﾄｯﾂｶﾞﾙﾄ、ﾊﾞﾙｾﾛﾅ） ▲地域づくり（小布施、京都西陣） ▲ヨーロッパの町並み、集落、近代建築、現代建築（ﾛｰﾃﾝﾌﾞﾙｸ、ﾍﾞﾈﾁｱ、ﾊﾟﾘ、ﾍﾞﾙﾘﾝ、ｼｭﾄｯﾂｶﾞﾙﾄ、ﾊﾞﾙｾﾛﾅ、ｱﾑｽﾃﾙﾀﾞﾑ、ｴｼﾞﾝﾊﾞﾗ、ｺｯﾂｳｫﾙｽﾞ）
	④公務員時代Ⅱ	49 58	2007.3 唐津街道姪浜まちづくり協議会設立 ■事務局長として約 10 年間、各ステージの地域課題に対応した多彩な活動を企画・実践し、多くの成果を上げる。 姪浜及び協議会の名前を全国に発信してきた。 2016.5 唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業	●2010.4 NHK「小さな旅」全国放送番組に移行 ▲歴史的町並み（横手増田、喜多方、大内宿、村上、倉敷、八女、鹿島） ▲近代建築（東京駅、八千代座、旧岩崎久彌邸、旧グラバー住宅） ▲現代建築（国立西洋美術館、長崎県立美術館、東京の新しい建築物） ▲寺社（会津さざえ堂、阿蘇神社） ●2016.4 熊本地震
	⑤公務員時代Ⅲ～現在	58 60	2016.6 地域づくりを巡る小さなまち旅 ■地域づくりや建築の原点に返る旅 ■熊本の復興の過程を巡る旅 ■身近なまち旅 2016.9 福岡アジア都市研究所会員研究員 ■身近な地域資源を活かしたまちづくり活動記録（2016 年度） ■身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究（2017 年度） 2018.3 福岡市役所退職	▲熊本の復興の過程を巡る旅（熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村） ▲地域づくりや建築の原点に返る旅（三角西港、孤風院、出津教会、﨑津教会、磯崎新氏設計の建築物、小布施や松代の地域づくり） ▲寺社（国東・長崎・対馬の寺社） ▲城郭（五稜郭、松本城） ▲教会（長崎や天草の教会） ▲近代建築（富岡製紙場、旧開智学校） ▲現代建築（隈研吾氏設計の建築物） ▲港・都市計画（小樽運河、鞆の浦、柳川掘割、川尻、三角西港）
現在		60 63	2018.4 建築確認検査機関に再就職 2019.6 福岡アジア都市研究所会員研究員 ■小さなまち旅 ～時間 空間 旅～ ■博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想	▲歴史的町並み（函館、小樽、川越、鞆の浦、秋月、八女、有田、美々津） ▲身近なまち旅（庭園、集落、路地、坂道、石橋、棚田、風景） ▲ヨーロッパの町並み、世界遺産（ｹﾙﾝ、ﾊｲﾃﾞﾙﾍﾞﾙｸ、ﾋﾞｭﾙﾂﾌﾞﾙｸ、ﾛｰﾃﾝﾌﾞﾙｸ、ｶﾞﾙﾐｯｼｭﾊﾟﾙﾃﾝｷﾙﾍﾝ、ﾐｭﾝﾍﾝ） ●2020.1 新型ｺﾛﾅｳｨﾙｽ感染症発生。観光分野にも甚大な影響が出る。

（２）現代建築を巡る旅（学生時代 1976.4～1980.3）

①建築との出会い（熊本大学建築学科入学）

筆者の建築を巡る旅の歴史は、熊本大学建築学科に入学した 1976 年に遡る。もちろんそれ以前にも修学旅行で京都や奈良の古建築等を見に行ったことはあるが、本格的に建築の見学に行き始めたのは大学に入学した時からである。当時の九州には著名な建築家の作品が多く、関東や関西の学生たちも九州の建築巡りをしていた。磯崎新氏、黒川紀章氏、白井晟一氏が設計した作品等がそのコースに入っていたようだ。当時の新聞にも「九州は現代建築の宝庫」と掲載されていた。

現在の熊本大学

筆者も様々な設計課題に取り組む一方、休みを利用して建築巡りを始めた。九州にある磯崎新氏が設計した建物の大半を見て回ったと思う。福岡市内では、博多駅前の福岡相互銀行本店（※建築物の名称は当時のもの。以下共通）や３つの支店（大名、六本松、長住）、秀巧社ビルを見学した。大分市内では大分県立大分図書館、大分県医師会館、富士見カントリークラブ、北九州市内では北九州市立中央図書館、北九州市立美術館、西日本総合展示場等を見学した。大学３年生の春休みには、群馬県立近代美術館にも出かけている。

また、黒川紀章氏設計の福岡銀行本店、白井晟一氏設計の親和銀行本店、前川國男氏設計の福岡市立美術館や熊本県立美術館等も訪問した。このように学生時代は九州の現代建築を中心にかなりエネルギッシュに見て回った記憶がある。

福岡相互銀行本店

秀巧社ビル

北九州市立中央図書館

西日本総合展示場

大分県立大分図書館

群馬県立美術館

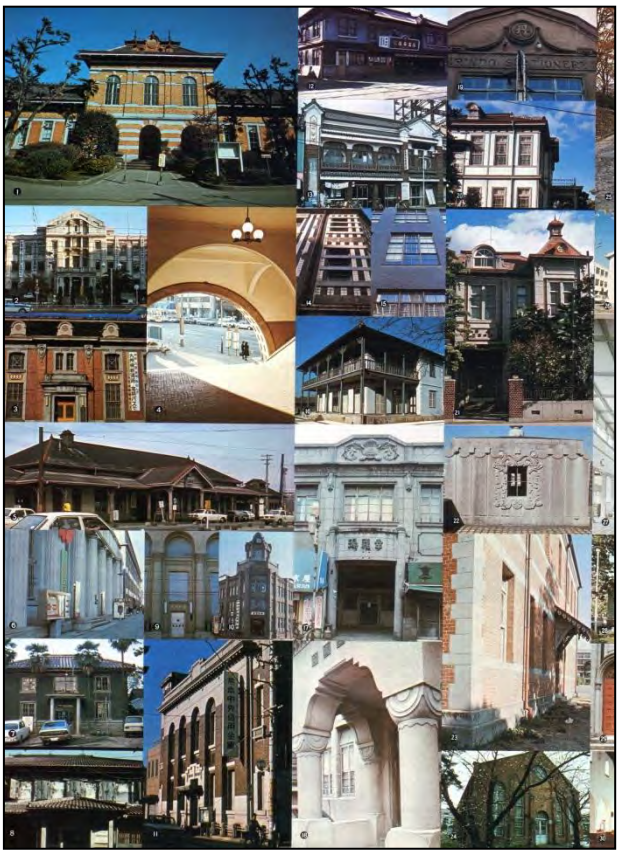
福岡銀行本店

親和銀行本店

大学時代に使っていた
カメラ(フジカ ST605)

②歴史的建造物への興味（木島安史先生との出会い）

筆者は大学３年生頃になると歴史的建造物にも興味を持ち始めたが、これはプロフェッサーアーキテクトである木島安史先生との出会いが影響していると思う。木島先生は、建築設計や都市計画を教える傍ら、建築評論家の長谷川堯氏といっしょに熊本の歴史的建造物の保存に取り組み、1974 年１月～３月に熊本日日新聞の夕刊で「家は生きていた～熊本の洋館・和館めぐり」を連載されていた。熊本市内には多くの歴史的建造物が大切に残されており、文化都市・熊本を実感できたのは、先生方の努力が大きかったと思う。「都市住宅 7406（1974 年６月号)」では、「発掘文化都市熊本」を特集しており、今でも懐かしく読み返しているところである。



ぜひとも残したい
しかし大きい保存費用

孫子の代まで大切に
軽々しく改造できぬ

得がたい住み心地
かなりかかる維持費

愛惜の心を持って
先人の生活しのばれる

「熊本の家」入念に取材
本誌編集部員が熊本へ出張して
「都市住宅」の編集長ら

この町は，この土地，この地域からはなれてありえない。　そういうことで，多くの人間が住んでつくり育ててきたこの地域の風土性をはなれて，文化はありえないとつくづく思い知らされました。

あのシリーズは一応終ったわけですが，しかし，新聞は一方的に情報を伝えるのみではないから，とり上げてこれで終ったというつもりはありません。　後存も実践的なものに結びつけていかなければならないから，今後，アフターケアが大切です。　ここからまちづくりの原点がひき出されてきます。

八千代座に行ったとき蔵を壊すという話でしたが，これがいいんですよという話が出て，それではこのままにしておきますよということになった。　記事が出たあと，市の当局者も駆合の人も，これは残さなければいけないのではないかなあという気になっているようですから，この次は，そうした資料をしたりバックアップをしなければならない。

個人の<家>は残したいという声が多いが，公共建築や学校などは壊したいといっている。代替小学校など最後の費料ということになるでしょう。　古いものが好かれない，お金があれば早く改造したいという声もありましたね。

しかし，そこに<家が生きてきた>そのままのかたちで保存されることによって，都市の風合いとか肌合いとかがかもし出されることを忘れてはいけないと思う。　新しいものと古いものをどのように調和させるか，それがその都市やまちの良さにもなる。　このまちづくりの原点から出発して，市民は何をすればいいのか。行政はどういう役割をはたすべきか，それに対して専門家はどういうようにコメントしていけばいいのか――そこまで行くと，地元紙としての責任がややはたせるのではないかと思います。

<ぜひとも残したい>の所有者と利用者の声――熊本日日新聞より

TJ7406 | 19

都市住宅 7406（1974 年6月号）「発掘文化都市熊本」より

今も息づく歴史的建造物（現在の熊本市古町）

また、木島先生を語る時には「孤風院」は欠かせない。孤風院は、1908 年（明治 41 年）、熊本高等工業学校の図書閲覧室（講堂）として建てられた熊本を代表する洋風木造建築であったが、1976 年（昭和 51 年）老朽化による解体決定に伴い、当時熊本大学助教授であった木島先生が買い取り、現在の地（阿蘇）へ移築し、住居として 1991 年（平成３年）まで利用されていた。移築後は住みながら改修を続けられ、木島先生が亡くなられてからは木島家の別荘としての利用の他、「孤風院の会」によってメンテナンスを含めた建築教育活動の場として利用されている。

大学の講堂としての役割を終え、買い取り手も見つからなかった建物を、自ら買い取り、改修し、住居として蘇らせ、明治～大正～昭和～平成～令和の５つの時代にわたり活用されていった。こうした建築への想いと行動力のある木島先生に大学時代に少しでも教わったことを今でも大変

誇りに思っている。こうして芽生えた歴史的建造物への興味は、大学４年次の卒業論文と卒業研究につながっていくことになる。

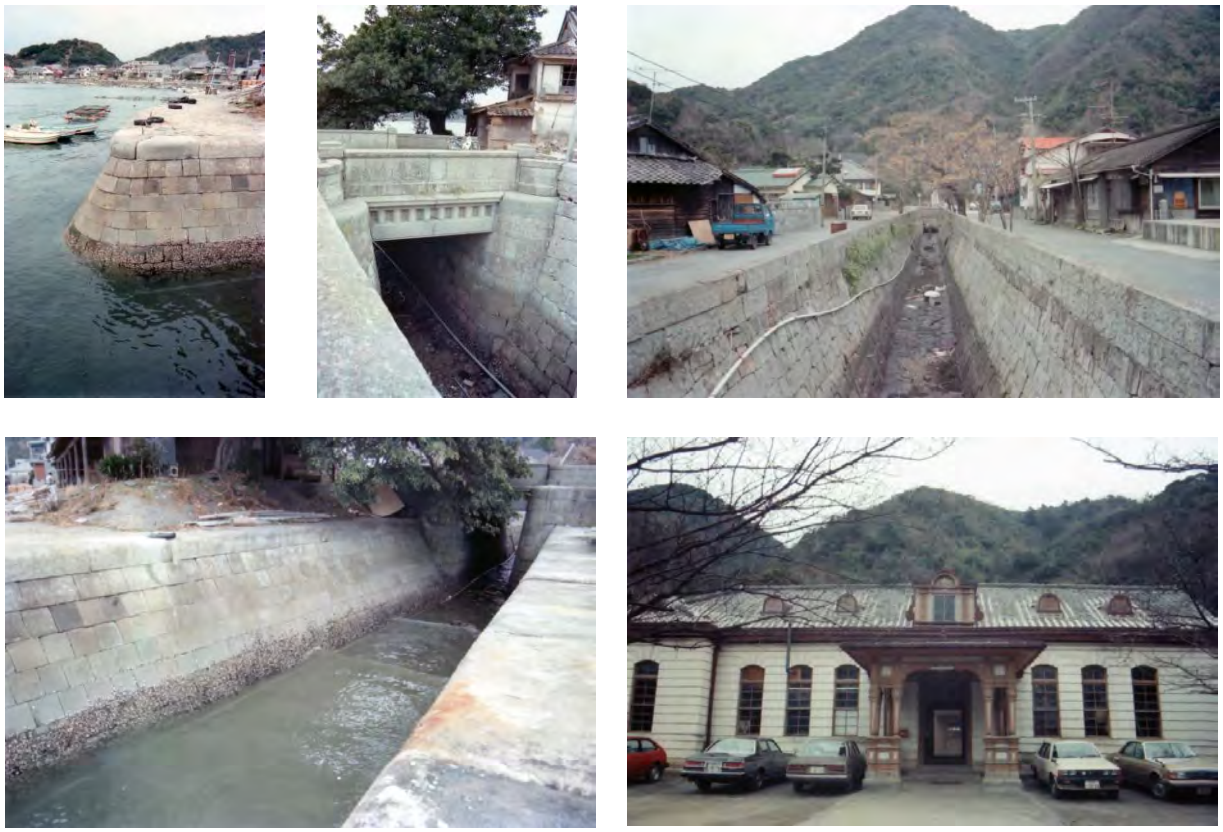
なお、孤風院については、木島先生の手記「孤風院白書」として出版されている。建築に携わる方には、ぜひ読んでいただきたい名著である。

孤風院白書

孤風院（2016 年８月）

③卒業論文

筆者の卒業論文のテーマは「熊本の洋風技術導入過程に関する研究～三角西港～」である。三角西港は 2015 年に世界文化遺産に登録されたが、当時は存在が知られているだけで、北野隆先生の指導を受け、筆者が最初に研究に取りかかることになった。



大学時代に研究していた頃の三角西港（1982 年２月。大学を卒業して２年後の写真）

三角西港は、明治政府の殖産興業の政策に基づいて、お雇い外国人のオランダ人水理工師のローエンホルスト・ムルドルによる設計で、1887 年（明治 20 年）に完成した。当時の最新の技術が盛り込まれた三角西港は、宮城県の野蒜（のびる）港、福井県の三国港と並び、近代国家の威信を懸けた明治三大築港の一つであった。有明海、不知火海の二つの海に面した三角町は、三角西港の整備により熊本県の海の玄関港として、人や物資が行き交う海上交通の要地として繁栄するとともに、宇土郡役所や三角裁判所の設置により宇土地域の行政や司法の中心地となった。

その後、港としての機能は三角港（東港）に移ったこともあり、756 メートルにも及ぶ石積みの埠頭や水路、建造物などは築港後 130 年の歴史を持ちながら、当時の佇まいを見せている。当時の都市計画がほぼそのままの形で残っているのは全国的にも珍しい。文化財的にも国際的にも価値ある生きた港として、2002 年 12 月に国の重要文化財に指定、2015 年 7 月に「明治日本の産業革命遺産　製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業」の構成資産として世界文化遺産に登録され、港町三角のシンボルとなっている。

現在の三角西港（2017 年 11 月）

こうして大学に入ってからの４年間、現代建築や歴史的建造物に興味を持ち、限られた時間と場所ではあるが建築を巡る旅を進めてきた。思い返せば、筆者が現在実践している「小さなまち旅～時間 空間 旅～」は、学生時代から脈々と続いているのである。

（３）歴史的建造物と町並みを巡る旅（会社員時代 1980.4～1986.3）

①建築巡り

1980 年４月、大阪に本社を置く鴻池組に入社。大阪での１週間程度の研修を経て、筆者は東京本店の設計部に配属された。前述のように筆者は、大学在学中から建築廻りをしていたが、建築を志す者にとって東京は憧れの都市であり、東京にいる間にいろいろな建物を見に行こうと思った。社会人になったこともあり、新しいカメラを購入。ボディはニコンの FE という中級機であるが、レンズは建築撮影用のあおり止め（ゆがみ補正）機能のある 28mm の PC レンズをまずは購入した。その後も 16mm の魚眼レンズと 80～200mm の望遠レンズを購入し、３つのレンズを 20 年以上愛用してきた（今でも使用可能である）。

ニコン FE と3つのレンズ

愛用のカメラで国内外の建築巡り

このカメラでいろいろな建築巡りをした。当時、村野藤吾氏の作品に興味があり、高輪プリンスホテル貴賓館、長野県小諸市の小山敬三美術館、長野県原村の八ヶ岳美術館、新潟県糸魚川市の谷村美術館等を見て回ったが、ディテールの写真をこれ程まで撮ることはなかった。村野氏は「建築家は 60 歳を過ぎてからが本来の仕事」と言われており、亡くなる直前まで仕事に情熱を傾けられていた。素材とディテールにこだわった職人的な手法から生み出された陰影に富む自在な造形は、独自の世界を生み出してきた。

小山敬三美術館

八ヶ岳美術館

また、「健康な家」をテーマに設計をしていた内井昭蔵氏の作品にも興味があった。横浜市青葉区にある桜台ビレッジや桜台コートビレッジ、銀座対鶴館ビル、千葉県鴨川市にある清澄寺祖師

堂、山梨県身延町の身延山久遠寺宝蔵、長野県野辺山の東京 YMCA 野辺山青少年センター等、ニコンの愛用カメラを持参し見て回った。40 年程前のことであるが、今でも記憶に新しい。本当に遠くまで見学に行ったものだ。建築への好奇心旺盛の時期であった。

この他、白井晟一氏の静岡市の芹沢銈介美術館や渋谷区立松濤美術館、表参道にある山下和正氏設計のフロム・ファースト・ビル、槇文彦氏の代官山プロジェクト、磯崎新氏の群馬県立近代美術館等が印象に残る。この時期は、素材とディテールにこだわった建物や、空間構成に人間味の感じられる建物に興味があったと思う。ちなみに建築巡りをする時は一人で行くことにしている。空間を体験して、自分で考えることが大切だと考えているからだ。自分の空間体験を大事にしたい。

清澄寺祖師堂

身延山久遠寺宝蔵

東京 YMCA 野辺山青少年センター

桜台コートビレッジ

芹沢銈介美術館

フロム・ファースト・ビル

代官山ヒルサイドテラス

群馬県立近代美術館

②歴史的建造物への興味の増進

歴史的建造物への興味もこの頃から増してきたように思う。奈良では法隆寺や薬師寺、室生寺が印象に残る。薬師寺は西塔が再建されたばかりであった。東塔と比較すると、壁や格子の色、屋根の反りが違うのが印象的であった。200 年経つと、同じような色や形になるという。とてもロマンを感じさせる話であり、薬師寺には愛用の PC レンズと望遠レンズを持って何回も通うことになった。東塔は 2020 年 12 月に 12 年に及ぶ大修理が完了しており、近いうちに訪問したいと考えている。

また、室生寺は自然豊かな山中に位置する、気品のあるお寺である。鴻池組の先輩である大隅さんが大好きだったお寺で、寮の大隅さんの部屋で五重塔の写真を見たことがある。五重塔とシャクナゲの組み合わせが印象に残っていた。五重塔は、法隆寺に次いで日本で二番目に古い塔である。高さは 16m 程度の小さな塔であるが、通常は上に行くに従い小さくなる屋根の出が、1 重目と 5 重目であまり変わらないため、重厚感を感じさせる。また機会を見つけて見に行きたい。全国の五重塔巡りもいいかもしれない。

薬師寺

室生寺の五重塔

京都では桂離宮、修学院離宮の他、円通寺、苔寺、詩仙堂、曼殊院等にも何回も行った記憶がある。何れの建物も古い歴史があり、庭もきれいである。茶室や風景、ランドスケープにも興味が出てきたのはこの頃だろうか。この後、京都には週末の休みを利用して国鉄（現 JR）の夜間バス「ドリーム号」で何度も通ったものだ。いつの季節も素晴らしい印象がある。

桂離宮

修学院離宮

③歴史的町並みへの興味

歴史的町並みへの興味が出てきたのもこの頃だろうか。大学時代は日本建築史のゼミに所属していたが、町並みへの興味はそれほどではなかった。社会人になり、現実的な仕事をする中で、本来自分がやりたいことは何なのかを考えていたのだろう。歴史的町並み保存の実務的な手引書である「歴史的町並み事典（西山卯三氏監修）」を購入したのもこの頃である。

思い起こすと、歴史的町並みの価値が見直されてきたのは、1970 年頃であろうか。筆者が中学生の頃である。当時の国鉄のキャンペーン「ディスカバー・ジャパン」は、大阪万博終了直後に「日本を発見し、自分自身を再発見する」ことをコンセプトに個人旅行拡大キャンペーンとして全国的に進められた。美しい日本の再発見をテーマにしたものである。

また、同じ時期に永六輔氏出演のテレビ紀行番組「遠くへ行きたい」も始まった。各地域の名所紹介や住民との触れ合いをテーマにした番組であり、国民の旅行への憧憬を誘った。大学時代に山口百恵さんが歌っていた「いい日旅立ち」も思い出す。高度成長時代に多くの歴史的建造物や町並みが失われてきた反省もあるのだろう。

さて、東京時代に筆者が訪れた町並みは、栃木県栃木市や埼玉県川越市の蔵の町並み等である。栃木市は江戸時代から例幣使街道の宿場町として、また舟運で栄えた問屋町として、北関東の商都と呼ばれた。黒塗りの重厚な見世蔵や白壁の土蔵群が残り、当時の繁栄振りを偲ばせている。福岡市役所に入り都市景観の業務に関わってからも訪れたことはあるが、筆者が東京にいた頃はまだ道路が拡幅される前であり、現在より古い町並みが残っていた。

栃木市の町並み（1980 年 11 月）

川越の町並みも東京時代に数度訪れた。まだ、舗装整備や電線類の地中化がされる前であり、今のように観光客は多くなかった。何回もの大火の末に防火性を考慮して導入されたた土蔵づくりや重厚な開き扉、堅牢な瓦屋根の町並みが印象的であった。古き良き物を大切にしようとした先人の知恵が詰まった建物や町並みである。関係者の方々の努力に頭が下がる思いである。

川越の町並み（1980 年 10 月）

倉敷も当時は今のように道路や町並みも整備されておらず、まだ素朴な町並みであったと思う。観光客も今ほど多くなかった。後で行くことになるが、ドイツのローテンブルクに似たような印象を持っている。多分、倉敷の町並み保存の提唱者である大原総一郎氏が「倉敷を日本のローテンブルクにしよう」と言っていた言葉が記憶に残っていたのだろう。倉敷には 27 年後の 2013 年９月の「第 36 回全国町並みゼミ倉敷大会」で再訪したが、長い間、地域や行政が一体となって守り、育ててきた町並みである。みんなが共通の思いを持っているのは羨ましい。

倉敷の町並み（1986 年3月）

④最初の海外への旅（古典建築を巡る旅）

福岡市役所に入るまでの１ヶ月を利用して、ギリシャ、イタリア、エジプトの古建築を見て回ることになった。1986 年３月のことである。

アテネでは、やはりパルテノン神殿が強烈な印象として残っている。これはドーリア式（ドリス式）の神殿であるが、ドーリア式は古代ギリシャ建築における建築様式（オーダー）のひとつであり、イオニア式、コリント式と並ぶ３つの主要なオーダーに位置付けられている。大学で習ったことを実際に現地で見ることになるが、感激したことを今でも覚えている。また、エーゲ海

に浮かぶ島々の統一された集落景観も印象的であった。

パルテノン神殿（左）、エーゲ海に浮かぶイドラ島の集落景観（右）

イタリアではミラノのガレリア、フィレンツェの街並み、ベネチアの運河、サン・マルコ広場、リアルト橋、ローマのコロッセオ、パンテオン等が印象に残っている。ポンペイの遺跡にも足を伸ばした。イタリアも北部の都市と南部の都市で印象が大きく異なっていた。この時にベネチアの建物の立面図を並べた街並みポスターを購入したが、街並みへの興味を深めるきっかけになったと思う。

ガレリア（ミラノ）

フィレンツェの街並み

コロッセオ（ローマ）

ポンペイの遺跡

街並みポスター（ベネチア）

エジプトは、車とラクダが共存する不思議な国であった。ピラミッドは「いつ頃」「どのような労働力によって」造られたかと言う点についてはおおむね解明されているようであるが、「なんのために」「どのような建築方法で」造られたかについては定説が無い。「王墓説」「日時計説」「穀物倉庫説」「宗教儀式神殿説」「天体観測施設説」など様々な説があるが、王墓説が強い。ということで、最初の海外旅行は古典建築を巡る旅であった。

ピラミッド

（４）景観づくりと地域づくりを巡る旅（公務員時代Ⅰ 1986.4～2007.2）

①２回目の海外への旅（美しい街並みを巡る旅）

６年間の鴻池組の勤務を終え、福岡市役所に入庁したのは、1986 年４月である。私が 28 歳の時である。その翌年に建築や街並みを巡る 10 日間のヨーロッパ旅行に出かけた。国としてはドイツ、オーストリア、イタリア、スイス、フランスの５ヶ国である。ドイツで最初に訪れたのはハイデルベルク。ネッカー川沿いの旧市街地の伝統的な街並みが印象的であった。その後、ローテンブルクに移動。ここは中世の街並みが色濃く残り、お洒落なお店やサインも特徴的であった。

ハイデルベルクの街並み

ノイスバンシュタイン城

ローテンブルクの街並み

オーストリアのウィーンでは、映画「第三の男」に登場した大観覧車に乗ったが、そこから見た水と緑に囲まれた市街地の街並みが印象的であった。名物のウィーナーシュニッツェル（パン粉をつけて両面を焼いた仔牛のカツレツ）やワインの美味しさも印象に残っている。

イタリアでは、再度ベネチアを訪問。博物館見学やサン・マルコ広場での散策後に特産のベネチアングラスと刺繍、街並みのポスターを購入。夕食前にゴンドラ船に乗船。何度来てもイタリアらしい場所だと感じる。イタリアに憧れたのは、歴史作家の塩野七生氏が執筆したイタリアの古代の歴史小説を読んでいたことが影響しているのかもしれない。ベネチアの歴史は興味深い。

次はローマである。コロッセオやパンテオン、映画「ローマの休日」で有名なスペイン広場、トレヴィの泉等を見学。バチカン市国ではサン・ピエトロ大聖堂も見学。ミケランジェロが設計したといわれる大円蓋（クーポラ）は高さ 132.5m、直径 42m もあり圧倒された。

ウィーン：大観覧車（左）、都心部の街並み（右）

ベネチア：運河とゴンドラ船（左）、サン・マルコ広場（中央、右）

ローマ：コロッセオ

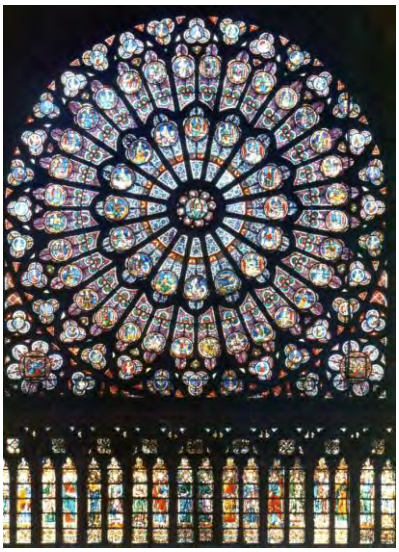
バチカン市国：サン・ピエトロ大聖堂

スイスではインターラーケンの山小屋風のホテルに宿泊。窓に飾られた花が可愛らしい。山と湖に囲まれたまちを散策した後、お土産として鳩時計を購入。夜は名物のチーズフォンデュを味わう。翌日、ユングフラウヨッホに登山列車で行くが、スイス旅行ならではの醍醐味であった。大自然が創り出す景色も山岳都市ならではの体験であった。

インターラーケン：街並み（左）、宿泊したホテル（右）

ユングフラウ：街並み（左）、高山列車（右）

最後はフランス。パリではノートルダム寺院に圧倒された。ステンドグラスも美しい。エッフェル塔から見たシンボリックで美しい都市軸は印象的であり、市街地の街並みも歴史を感じさせるものであった。セーヌ川の遊覧船に乗船した後、ヴェルサイユに移動し、ヴェルサイユ宮殿を見学。建物の優雅さ、絢爛豪華な装飾品など、その魅力は尽きなかった。宮殿近くのホテルに宿泊したが、部屋から見える庭園と飼われている羊がのどかな印象を与えていた。



パリ：市街地の街並み（左）、ノートルダム寺院のステンドグラス（右）

ヴェルサイユ：ヴェルサイユ宮殿（左）、宿泊したホテル（右）

②都市景観室時代の先進都市調査

福岡市役所入庁後８年目の 1993 年に都市景観室に配属された。都市景観室での筆者の主な業務は、都市景観条例に基づく「都市景観形成地区の指定」である。これは地域が主体となって、それぞれの地域の特性を活かした景観まちづくりを進めていく手法である。当時は「シーサイドももち地区」「御供所（ごくしょ）地区」「天神地区」等がその候補に挙げられていたが、具体的に進めていくために先進都市調査を重ねてきた。

国内で都市デザインの視点で取り組んでいたのが横浜市と神戸市であり、都心部や海浜部、歴史的環境地区等で様々な取り組みをしていた。筆者も何回も訪問したものである。

また、福岡市有数の歴史的環境地区である御供所地区の景観づくりの参考とするため、御供所まちづくり協議会の会員といっしょに京都、奈良、富田林、出石、長浜、金沢等に視察に行った。どこも歴史的な環境を活かしたまちづくりの先進地である。最初に京都に視察に行った時には、京都市の当時の景観担当係長の苅谷勇雅氏に説明していただいた。苅谷氏は後に文化庁に行かれ、全国町並み保存連盟でも活躍されている。その後、筆者は何回も苅谷氏の話を聴く機会に恵まれた。御供所地区の取り持つ縁であろう。

京都市西陣大黒町の視察

富田林では、まちづくり団体の代表が「まちづくりは焦るな、怒るな、根気よく」と言っていたことが印象に残っている。姪浜でも筆者がよく使った言葉である。出石は土色の町並みが特徴で、蕎麦やお酒も美味しかった。雪もかなり積もっていたことが記憶に残る。金沢でも雪を体験

することができた。金沢は雪国の印象があるが、雪が積もることは少ないそうだ。雪の兼六園や茶屋街、武家屋敷も風情があった。それぞれの視察を通じて、まちづくり協議会の会員とのコミュニケーションや信頼関係を築いていった。

金沢市：ひがし茶屋街（左）、主計町（かずえまち）茶屋街（右）

金沢市：雪の兼六園（左）、雪の武家屋敷（右）

長野県須坂市の町並み

長野県小布施町の町並み

③海外派遣研修

1995 年の海外派遣研修も市役所生活の思い出である。これは、「欧州における都市デザインの潮流」をテーマにロンドン、フランクフルト、ベルリン、シュトゥッツガルト、バルセロナ、パリの６都市の都市景観施策について約３週間にわたり調査を行ったものである。当時は御供所地区やシーサイドももち地区の景観形成地区指定の地元協議などを進めている最中であり、各地域固有の歴史や魅力資源を活かしたまちづくりや景観づくりの参考にすることが目的であった。

各都市の調査テーマ

○ロンドン

・歴史・伝統を尊重したシティの街並み景観コントロール制度について
・歴史的文脈を現代建築に取り入れているドックランドの都市デザインについて

○フランクフルト

・国際コンペの導入による公共建築の先導的役割について
・都市空間の質的改善を目的とした都市デザイン事業について

○ベルリン

・都心居住をテーマにした、マスターアーキテクト方式及び住民参加方式によるまちづくり・都市デザインについて……IBA（国際建築展ベルリン）
・ベルリンの壁崩壊後の首都移転計画及び新都市計画について

○シュトゥッツガルト

・B プランによる街並み形成状況について
・環境共生型の都市デザインについて
・人にやさしい公共交通と回遊性の高い歩行者空間について
・歴史的建造物群の保全と都心居住への一体的取り組みについて

○バルセロナ

・ロマネスク、カタロニアゴシック、そしてアントニオ・ガウディに代表されるカタロニアモデルニスモの建築と現代建築が調和し、歴史的継続性・重層性を感じさせるバルセロナの都市デザインについて
・近年の都市再建プロジェクトについて

○パリ

・主要軸線、シンボル広場及びそれらのネットワークについて
・歴史都市と先端建築が融合したグラン・プロジェのまちづくりについて

ロンドンの街並み

フランクフルトの街並み

ベルリンの街並み

シュトゥッツガルトの街並み

バルセロナの街並み

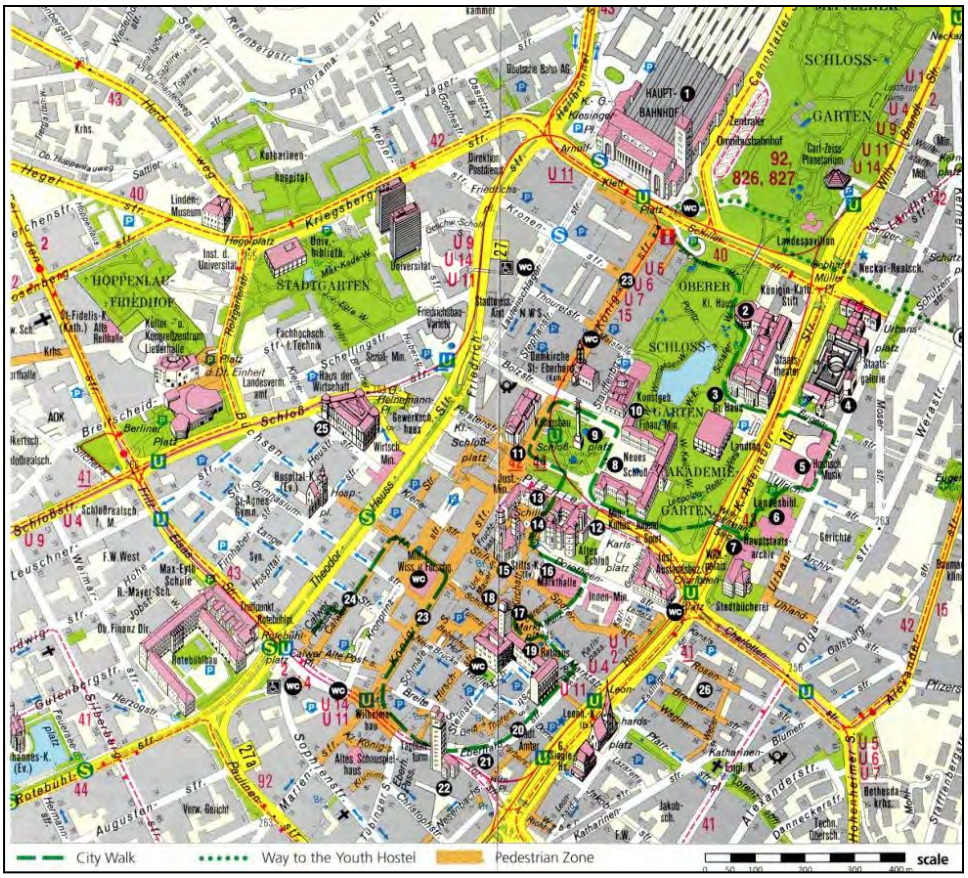
パリの街並み

海外派遣研修を終えての当時の感想

今回調査した６都市は、どこに行っても画一化・均質化した日本の都市空間とは全く異なり、素晴らしい刺激を与えてくれた。フランクフルトのムゼウム・ウファープロジェクト（公共建築の先導性）、ベルリンの首都移転計画と IBA（国際建築展ベルリン）、シュトゥッツガルトの環境共生型の都市デザイン、歴史的重層性・継続性を感じさせるバルセロナの都市デザイン、度肝を抜くパリのグラン・プロジェは、どれも個性的で魅力あるプロジェクトであった。

特に感動したのが、シュトゥッツガルトの徹底的に人にやさしく、エコロジーに配慮された都市空間である。今後の日本のまちづくりの素晴らしい参考例となるだろう。また、ベルリンの首都移転計画をはじめとする各種のプロジェクトはとても感動的であった。東西冷戦後のベルリンの変容は驚くべきスピードで進んでおり、国際的な建築家による大胆なプロジェクトは未来の輝かしいベルリンを約束しているように思える。こうした取り組みは、すぐに福岡市のまちづくりに役立つものではないが、歴史的な文脈を現代に大胆に取り入れていくというスケールの大きな発想や、徹底した環境共生型の都市デザインなどは、大いに参考にしていきたい。

バルセロナ：ランドスケープ・デザイン（出典：現地で入手したパンフレット）



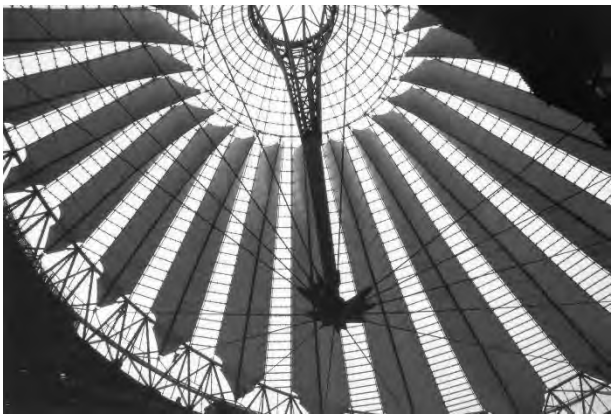
シュトゥッツガルト：徹底的に人に優しい公共空間（出典：現地で入手したマップ）

パリ グラン・プロジェの事例

④福岡都市科学研究所での先進都市調査

2000 年４月から研究主査として福岡都市科学研究所（現(公財)福岡アジア都市研究所）に配属され、研究の一環で国内外の様々な都市に調査に行く機会に恵まれた。

１年目は「福岡の地下空間の利用に関する研究」を担当し、ドイツのベルリンやシュトゥッツガルト、オランダのアムステルダムやユトレヒト等を視察。各都市の地下空間の利用に関する取り組み、都市形成の歴史、街並みの変遷等について調査した。



ベルリン：地下ネットワーク（左）、新都市開発（右）

アムステルダム：運河沿いの空間利用と景観（左）、都心居住地区の街並み（右）

２年目と３年目は「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」を担当し、イギリスのウエスト・ミッドランド地域の多核連携的な都市ネットワークや地域計画、コッツウォルズ地方のグリーン・ツーリズム、セントラル・スコットランド地域の広域都市連携、ドイツの都市

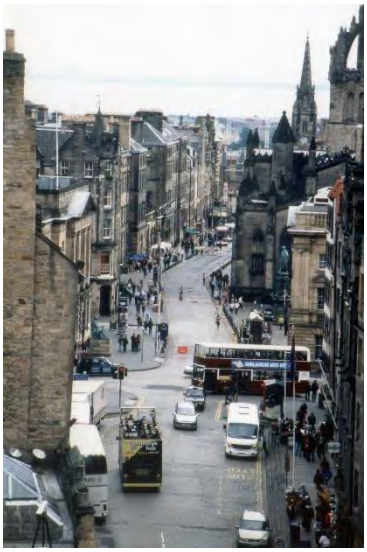
ネットワークモデル地域等に関する取り組みについて調査研究を行うため、次の都市を訪問した。

○ウエスト・ミッドランド地域：バーミンガム、ストラトフォード・アポン・エイボン、ウォーリック

○コッツウォルズ地方：チェルトナム、カッスル・クーム、バイブリー

○セントラル・スコットランド地域：エジンバラ

○ニーダーザクセン州：ハノーバー



エジンバラの街並み：オールド・タウン（左）、ニュー・タウン（右）

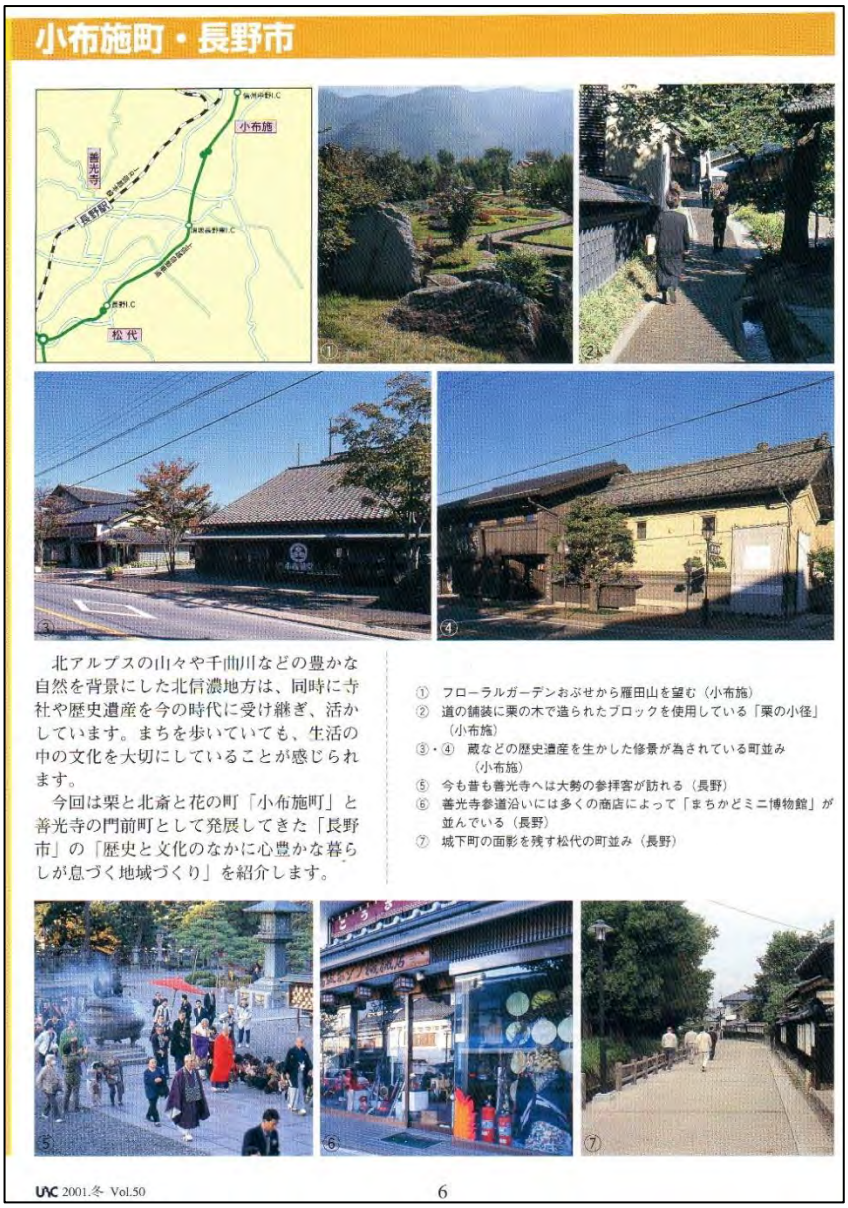
ウエスト・ミッドランド地域の街並み：ストラトフォード・アポン・エイボン（左）、ウォーリック（右）

コッツウォルズ地方の街並み：カッスル・クーム（左）、バイブリー（右）

ハノーバーの街並み

また、国内の特色のある都市に調査に行く機会にも恵まれた。特に思い出に残るのは、長野県小布施町である。都市景観室時代に２回訪れていたが、何度訪れても面白いまちである。半径２㎞の範囲にいろいろな見どころが満載であり、１年間の観光客（約120万人）は人口（約１万２千人）の 100 倍にもなる。

「小布施流」のこだわりのまちづくりは、景観づくりや地域活性化等の様々な面で御供所や姪浜の参考になる。筆者が「姪浜流」のまちづくりを言い出したのは、小布施流から借りてきた言葉である。



小布施町・長野市

北アルプスの山々や千曲川などの豊かな自然を背景にした北信濃地方は、同時に寺社や歴史遺産を今の時代に受け継ぎ、活かしています。まちを歩いていても、生活の中の文化を大切にしていることが感じられます。

今回は栗と北斎と花の町「小布施町」と善光寺の門前町として発展してきた「長野市」の「歴史と文化のなかに心豊かな暮らしが息づく地域づくり」を紹介します。

① フローラルガーデンおぶせから雁田山を望む（小布施）
② 道の舗装に栗の木で造られたブロックを使用している「栗の小径」（小布施）
③・④ 蔵などの歴史遺産を生かした修景が為されている町並み（小布施）
⑤ 今も昔も善光寺へは大勢の参拝客が訪れる（長野）
⑥ 善光寺参道沿いには多くの商店によって「まちかどミニ博物館」が並んでいる（長野）
⑦ 城下町の面影を残す松代の町並み（長野）

URC 2001.冬 Vol.50　6

小布施町、長野市の都市リポート（URC 都市科学 2001 年冬号）

（５）地域主体の景観づくりと地域づくりを巡る旅（公務員時代Ⅱ 2007.3～2016.5）

①唐津街道姪浜まちづくり協議会設立

その後も、筆者は福岡市役所での仕事を続けていくことになるが、大きな転機が訪れた。それは、2005 年３月の福岡県西方沖地震である。筆者の住む姪浜でも多くの町家や寺社が被害を受けた。被害を受けて改めて気付くというのは残念であるが、しかし、「姪浜にはこんなに素晴らしい歴史的資源が残っていたのか。まだ遅くはない。歴史的な環境を活かしたまちづくりを進める上で、これが最初で最後のチャンスだ。」と前向きに考え、地域の関係者に声をかけ、２年後にまちづくり協議会を立ち上げた。筆者が 49 歳の時である（2007 年３月）。

それまで福岡市職員として長く景観行政に携わっていながら、自分が住む地域のことにはあまり関心がなかった。それからは今までの 20 年間を取り戻すかのように『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に様々な活動を精力的に展開してきた。

※「唐津街道姪浜まちづくり協議会の活動」については、2016～2017 年度の報告書参照

②まちづくり協議会の活動の一環としての「身近な景観づくりを巡る旅」

筆者は、唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中（2007 年３月～2016 年５月）に、まちづくり協議会の活動の一環として北部九州の「身近な景観づくりを巡る旅」を実践してきた。地域が主体となって景観づくりの取り組みを精力的に展開している地域の概要を紹介する。

鹿島市の肥前浜宿は、浜川の河口につくられた在方町（江戸時代の農村における小都市集落）である。江戸時代は長崎街道多良往還（多良海道）の宿場町として、また有明海に臨む港町として栄え、明治以降も酒造業や水産加工業に支えられ、豊かな町並みがつくられてきた。江戸時代から「浜千軒」といわれ、通り沿いには今でも白壁土蔵造りの酒蔵や草葺の町家が立ち並び、伝統的な景観を色濃く残している（伝統的建造物群保存地区）。

鹿島市肥前浜宿の町並み

嬉野市の塩田宿もかつて長崎街道沿いに栄えた宿場町である。すぐ近くを流れる塩田川は当時、嬉野や有田など、焼物の積み出しや陸揚げを行う港として利用され繁栄した。物資取引の中心地となった馬場下一帯は今も白壁造りの町家が残り、当時の様々な建築様式がかつての面影を伝えている（伝統的建造物群保存地区）。

島原市の森岳商店街は、島原市内の６つの商店街のひとつである。近くに島原城があり、この特性を活かしたまちづくりを進めている。伝統的建造物群保存地区ではないが、古い町家や商家

を「登録有形文化財（文化庁）」「まちづくり景観資産（長崎県）」「まち並景観賞（島原市）」の制度で認定することで、歴史的景観を活かしたまちづくりを進めている。

嬉野市塩田宿の町並み（左）、島原市森岳商店街の町並み（右）

雲仙市の神代小路（こうじろくうじ）は、天正 15 年（1584 年）の九州国割を経て、慶長 13 年（1608 年）鍋島信房が初代領主となったことに始まる。城跡の森と塀を兼ねた川に囲まれた武家地ならではの閉鎖的な空間を有している。江戸中期の地割りをよく残し、武家屋敷建築の主屋や長屋門が屋敷囲いを構成する生垣や石垣、水路等の環境要素と相まって美しい町並み景観を醸し出している（伝統的建造物群保存地区）。

豊後高田市の昭和の町は、昔どこにでもあった町並み（今は失われた町並み）を逆手にとり、『商業と観光』の一体的振興策として「昭和の町」づくりという明快なテーマをもとに、「店舗修景（お化粧直し）」「かつて 1 万俵の米を納めていた旧農業倉庫を活用した観光拠点づくり（昭和の夢町三丁目館）」「地元住民がまちを紹介する‘ご案内人’制度」など、オリジナリティある取り組みが行われている。

雲仙市神代小路の町並み（左）、豊後高田市昭和の町の町並み（右）

臼杵市の臼杵は城下町で、寺院、町家、商家、武家屋敷、洋館が混在しており、独特の町並みを形成している。特に二王座付近は、ゆるやかな坂道が続く静かな町であり、伝統的建造物群保存地区ではないが、質の高い建築が豊かな町並みを創出し、変化のある独特の風情を醸し出している。町家も狭い路地に密集して建ち並んでおり、迷路のようである。江戸時代から現在に至るまでの長い歴史を随所に感じることができた。

杵築市の北台南台は江戸時代の城下町の風情が残るまちである。杵築城を中心として南北の高台に武士が住み、その谷あいに商人が住んでいた町で、「サンドイッチ型城下町」の構造となっている。特に北台武家屋敷通りは、上級武士や家老たちの屋敷がずらりと並び、今でも色濃く江戸時代の面影を留めている（伝統的建造物群保存地区）。

臼杵市臼杵の町並み（左）、杵築市北台南台の町並み（右）

この他、木屋瀬（こやのせ）（北九州市）、赤間（宗像市）、津屋崎（福津市）、内野（飯塚市）、筑後吉井（うきは市）、八女福島（八女市）、小保・榎津（大川市）、山鹿（山鹿市）、新町・古町（熊本市）等を訪問し、それぞれの地域の景観づくりの取り組みを学んできた。この中で筆者が代表を務める「まちなみネットワーク福岡」に所属する主な地域の取り組みについては、2017年度の報告書に詳しく紹介しているので、ご参照いただきたい。

※「身近な景観づくりの取り組み」として、2017 年度報告書第２章４参照

③筆者自身の「景観づくりと地域づくりを巡る旅」

筆者は、唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中に個人的にも様々な地域を訪問している。まずは、新潟県最北の城下町「村上」。かつては観光客がほとんどいないまちであったが、道路拡幅問題を機に、地域の宝である伝統的な町屋に光を当てたイベントにより全国から多くの観光客が訪れるようになった。これがきっかけとなり、「黒塀プロジェクト」や「町屋再生プロジェクト」といった市民主体の景観づくりプロジェクトにつながり、「歴史を活かしたまちづくり」が展開されている。現在は、空き家問題にも取り組み、地域再生の大きな力になっている。

村上市安善小路の町並み

また、秋田県横手市増田は、江戸後期から昭和初期にかけて造られた内蔵（家屋の中にある蔵）が 40 棟以上残っている。しかし、外から目に触れることがないため、その存在は長い間ベールに包まれてきた。地元以外にも知られるようになったのはこの数年である。2012 年からは内蔵の個別公開も始まり、観光資源として生まれ変わりつつある。また、2013 年 12 月には国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、今後の町並み整備が大いに期待される。

横手市増田の町並み（左）、内蔵（右）

その他、伝統的町並みが残る地域として、角館（仙北市）、会津若松市、喜多方市、大内宿（下郷町）、川越市、長岡市、倉敷市、那覇市等を、また、路地が残る地域として谷中（台東区）、神楽坂（新宿区）等を訪問し、地域の個性を活かした景観づくりや地域づくりの参考にしてきた。

仙北市角館の町並み（左）、下郷町大内宿の町並み（右）

川越市川越の町並み（左）、長岡市谷内（やち）の町並み（右）

倉敷市倉敷川畔の町並み（左）、那覇市壺屋の町並み（右）

台東区谷中の町並み

新宿区神楽坂の町並み

※「思い出に残る地域づくりの取り組み」として、2017 年度報告書第２章５参照

２　現在の旅（2016 熊本地震前後～）

（１）現在の旅のきっかけ（姪浜から熊本へ）

前述のように筆者は、大学時代から町並みや建築物に興味を持ち、多くの地域、集落、歴史的町並み、歴史的建造物、現代建築等を見て回った。また、唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中は「地域主体の景観づくりと地域づくりを巡る旅」を実践してきた。ここでは、熊本地震前後から始めた旅について紹介する。

2016年４月の熊本地震を経て、５月末の唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業後に筆者がまず始めたことは「地域づくりや建築の原点に返る旅」「熊本の復興の過程を巡る旅」である。これは、姪浜での10年間のまちづくり活動を振り返る旅であり、次の二毛作目の人生に向かって自分を見つめ直す旅でもある。筆者は、被災後の熊本城や大学時代の卒業研究のフィールドであった三角西港訪問をきっかけとして、それぞれの風土や身近な歴史・文化を活かしたまちづくりを進めている地域や集落等を訪問している。各地域の風土や景観に触れ、それぞれの地域の取り組みを学ぶことで、地域づくりや建築への想いを新たにしている。

筆者の現在の旅は、熊本地震の直前に熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋等を訪れ、それらが甚大な被害を受けたことが大きなきっかけとなったことが次の表からもおわかりいただけると思う。

熊本地震前後の旅

年　月	主な訪問先
2016 年３月	■20 日～21 日 山鹿市（さくら湯、八千代座） 南阿蘇村（思い出のペンション、阿蘇大橋、免の石） 阿蘇市（阿蘇神社、草千里）
４月	■２日 南阿蘇村（一心行の桜、阿蘇大橋） 熊本市（熊本城） **※4/14、4/16　熊本地震（震度７）**
５月	**※5/31　唐津街道姪浜まちづくり協議会を卒業**
６月	■18 日　熊本市（熊本城） **※6/18　熊本地震後の熊本城を訪問。これが「地域づくりや建築の原点に返る旅」「熊本の復興の過程を巡る旅」のきっかけとなる。**
７月	■３日 宇城市（三角西港）※熊本大学時代の筆者の卒業研究のフィールド ■30 日～31 日 長崎市（外海集落と出津教会） 天草市（﨑津集落と﨑津教会）
８月	■１日 波佐見町（中尾山集落） ■15 日～16 日 益城町（熊本地震被害） 南阿蘇村（思い出のペンション、阿蘇大橋、黒川地区） 阿蘇市（阿蘇神社、孤風院）

※青字：地域づくりや建築の原点に返る旅　　赤字：熊本の復興の過程を巡る旅

次のエッセイは、第13回JTB交流文化賞（2017年）に応募した筆者の執筆文である（写真追加）。熊本地震で大きな被害を受けた熊本城の訪問を機会に、二毛作目の人生に向けて始めた筆者の二つの小さなまち旅をエッセイにしたものである。

二毛作目の人生の始まりは、被災後の熊本城訪問から

二つの激震と私の決断

私は、福岡市西区姪浜で活動しているまちづくり協議会の初代事務局長の役を担った（2007年３月～2016年５月）。2007年３月に自ら協議会を立ち上げて以来、『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に、地域固有の歴史・文化資源を活かしたまちづくりを牽引してきた。姪浜への熱い想いを込めた10年間の活動は、全国レベルのまちづくり賞を多数受賞するなど姪浜の魅力や協議会の活動を全国に発信することができた。

私は、今後も「姪浜のまちづくりの次のステージ」に向けて、地域の関係団体を巻き込みながら、さらに活動をステップアップさせていく予定であった。しかし、2016年４月、まちづくりの進め方や協議会の運営方針などに対する他の会員との考え方の違いが表面化し、私は10年という節目を機会に断腸の想いで協議会卒業を決断した。地域のために精力的にまちづくり活動を推進してきた私にとっては、予期せぬ激震であり、大きな決断であった。

まちづくり協議会での私の活動のひとこま

また、協議会卒業を決断しかけた４月中旬、熊本で震度７の大地震が発生し、甚大な被害をもたらした。信じられない光景がテレビに映し出された。私は建築物の耐震関係の仕事をしていることもあり、また、建築を学ぶため学生時代を熊本で過ごしたこともあり、今回の熊本地震はとても考えさせられるものがあった。

ちょうど熊本地震前の３月中旬～４月上旬にかけて２回、熊本や阿蘇に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村などを見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。それはまさに『建築物の耐震化は重要な仕事である。大学時代の恩返しをしよう。地域づくりの原点に返ろう。』と私に伝えているようだった。姪浜という狭いフィールド、協議会という小さな組織を離れ、もっと大きな視点で世界を見てみようというメッセー

ジだったのだろう。そして、私は５月下旬の定期総会で協議会卒業の意志を伝え、思い出の多い事務所を後にした。

阿蘇大橋の崩落現場（左）、南阿蘇村黒川地区の家屋の倒壊（右）

被災後の熊本城訪問～失意のどん底からの立ち直り～

協議会卒業後、まちづくり活動というライフワークを失った私は、失意のどん底にあり途方に暮れていたが、2016 年６月中旬、気になっていた被災後の熊本城を訪れた。傷ついた熊本城の姿に自分の姿を重ね合わせていたのかもしれない。熊本地震以降、熊本城の被害状況はテレビや新聞で大きく報道されていたが、実際に見るとその被害の大きさに言葉を失った。石垣は大きく崩れ、天守閣は鯱を含め多くの瓦が落下するなど、無残な姿をさらけ出していた。

しかし、甚大な被害を受けながらも勇壮に佇んでいる姿はまさしく熊本のシンボルであり、私はとても勇気づけられた。飯田丸五階櫓や戌亥櫓は周囲の石垣が崩壊し、コーナーの石垣一本で辛うじて櫓を支えているだけであるが、この懸命な姿にも感動した。また、傷ついても勇壮に佇む熊本城を誇りに思い、来訪者に熊本城の魅力や地震後の状況を丁寧に説明しているボランティアガイドの皆さまの熱心な姿にも感銘を受けた。熊本城はこれまでにも戦、地震、火災にも負けずに何度も復活してきた歴史があり、彼らは今回の大地震やそれによる甚大な被害も、今までの 400 年そしてこれからも長く続くであろう歴史のひとこまとして大変前向きに考えているのだなと実感した。そう考えれば、私の姪浜での 10 年も長い人生のひとこまであり、これからの二毛作目の人生もより充実したものにできるのではないかと、私も前向きに考えることにした。

熊本地震で大きな被害を受けた熊本城。天守閣（左）と飯田丸五階櫓（右）

地域づくりや建築の原点に返る旅

被災後の熊本城訪問で勇気とエネルギーをもらった私は、少し息を吹き返した。まず、始めたことは「地域づくりや建築の原点に返る旅」である。これは、姪浜での 10 年間のまちづくり活動を振り返る旅であり、次の二毛作目の人生に向かって自分を見つめ直す旅でもある。初めての場所もあるし、思い出の場所もある。大学の卒業研究で関わった場所もあるし、建築を志した時に訪れた場所もある。テーマは地域づくりや建築の勉強でもいいし、人との出会いでもいい。何か感じ取ることができれば、それで十分なのである。そして、私が地域づくりや建築の原点に返る旅のスタートとして選んだのは、大学の卒業研究のフィールドであった「三角西港」と、建築を志した時に感銘を受けた「孤風院」という洋風建築である。

三角西港は、明治政府の殖産興業の政策に基づき、お雇い外国人のオランダ人水理工師ムルドルによる設計で 1887 年（明治 20 年）に完成した。当時の最新の技術が盛り込まれた三角西港は、近代国家の威信を懸けた明治三大築港の一つであり、三角町は熊本県の海の玄関港として、また、人や物資が行き交う海上交通の要地として繁栄した。その後、港としての機能は三角港（東港）に移ったこともあり、756 メートルにも及ぶ石積みの埠頭や水路、橋などは築港後 130 年の歴史を持ちながら、当時の佇まいを見せている。

私は、大学を卒業して 36 年後の 2016 年 7 月上旬に久し振りに三角西港を訪問した。石積みの埠頭や水路は当時とほとんど変わらないが、1987 年の築港 100 周年を機に、当時の建築物の復元や周辺の公園整備も行われ、観光地としても賑わいを見せていた。復元された小説家・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）ゆかりの旅館・浦島屋、倉庫を改修したカフェなど明治の面影を残す建築物が印象的であった。大学時代にはだれ一人として観光に訪れる者はいなかったが、突然の雷雨にも関わらず多くの観光客が訪れていた。当時をよく知る私にとっては、想像もできないことであった。

大学時代に私が始めた研究が一つのきっかけとなり、重要文化財の指定や世界文化遺産の登録が行われ、多くの観光客が訪れる港町になったことを本当に嬉しく思う。そして、三角西港の魅力をここまで高めていただいたすべての関係者の皆さまに感謝の気持ちでいっぱいである。エピソードになるが、長年使っている腕時計の針が三角西港を訪れた時に突然止まった。まるで大学時代にタイムスリップしたかのように。それは、私に「地域づくりの原点に返ろう」と示唆しているかのようだった。

現在の三角西港

次は孤風院である。孤風院は、1908 年（明治 41 年）、熊本高等工業学校の講堂として建てられた熊本を代表する洋風木造建築であった。しかし、1976 年（昭和 51 年）、老朽化による解体決定に伴い、当時熊本大学助教授であった木島安史先生が買い取り、現在の地（阿蘇）へ移築し、住居として 1991 年（平成３年）まで利用されていた。移築後は住みながら改修を続けられ、1992 年（平成４年）に木島先生が亡くなられてからは木島家の別荘としてのほか、「孤風院の会」によってメンテナンスを含めた建築教育活動の場として利用されている。大学の講堂としての役割を終えた建築物を自ら買い取り、改修し、住居として蘇らせ、明治～大正～昭和～平成の４つの時代にわたり活用されていった。

こうした建築への想いと行動力のある木島先生に大学時代に少しでも教わったことを今でも大変誇りに思っている。私は熊本地震から４ヶ月後の８月中旬に孤風院を訪問したが、外から見る限りは大きな損傷はなかったようだ。一安心である。木島先生の想いを受け継いだ建築物を訪問することで、建築への想いを新たにした。同行した長男は建築を学ぶ大学生であるが、私は木島先生の建築に込める想いを長男に伝えたかったのである。私にとっては、これこそ「建築の原点に返る旅」であり、「親から子へメッセージを伝える旅」でもある。

現在の孤風院

私は、三角西港や孤風院訪問をきっかけとして、それぞれの風土や身近な歴史・文化を活かしたまちづくりを進めている地域や集落、各地に残る歴史的建造物などを訪問している。それぞれの地域の取り組みを学び、地域の方々と出会い、対話することで、地域づくりや建築への想いを新たにしている。

熊本の復興の過程を巡る旅

また、私は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本県内を訪問している。被害を受けている熊本の状況をしっかり目に焼き付けておきたいからである。その中でも、熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋、そして益城町や南阿蘇村の被害はとても痛ましいものがあった。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖され、観光客も激減している。地震前とは違う光景が広がっていた。

折しも 2016 年８月上旬、熊本地震前に制作された映画「うつくしいひと」の上映会が福岡市内であった。熊本城、夏目漱石旧居、江津湖、菊池渓谷、草千里、通潤橋といった熊本の名所の地震前の姿が映し出された。私は、こうした名所がまた元の姿に戻るよう願わずにはいられなか

った。と同時に、これから長い時間をかけて進められていく復興の過程を見に定期的に熊本を訪問することとした。熊本城の復興には 20 年かかると言われている。私は現在 59 歳であり、熊本城が復興される頃には 80 歳近くになっているが、復興の過程を見に何度も訪問したいと考え、実践を続けている。

熊本地震から 1 年経った 2017 年 4 月上旬には満開の桜を見に訪れたが、石垣と桜の美しさは熊本だけでなく、日本の誇りだと改めて感じた。多くの市民や観光客も訪れ、賑わいを見せており、復興の足音を強く感じた。また、5 月下旬の訪問時には、天守閣再建に向けて一部解体工事が始められていた。城内にある加藤神社では、復興工事の様子をバックに結婚式の記念写真の撮影が行われていた。新郎新婦も熊本城の復興とともに今後の人生を歩んでいくのだろう。「いつまでもお幸せに」と祈りつつ、私も思わず記念写真撮影のシャッターを切っていた。

熊本地震から1年後の桜が満開の頃の熊本城（左）
天守閣再建に向けて一部解体工事が始められた頃の熊本城（右）

また、南阿蘇村の一心行の桜も地震前と同じように咲き誇り、黄色の菜の花や青い空とのコントラストが鮮やかであり、多くの来訪者で賑わっていた。落ちない石で有名な免の石は熊本地震で残念ながら落ちたが、地元の方々がそれを逆手に取り、石が落ちた後の空洞の姿を招き猫に例え PR していた。私は、逆転の発想に思わず猫のように「ニャッ（ニャー）」としてしまった。「ピンチをチャンスに」という前向き思考の考え方に私は勇気づけられた。

熊本地震から1年後の一心行の桜（左）、落石後の免の石（右）

倒壊した阿蘇神社も復興に向けて新たな歩みを始めていた。毎年のように訪問している南阿蘇村のペンションも地震後は一時休館していたが、３ヶ月後に再開。オーナー夫婦とも再会し、喜びを分かち合うことができた。

復興が始まった阿蘇神社（左）
毎年訪れる南阿蘇村のペンション。熊本地震から3ヶ月後に再開（右）

このように熊本の復興の過程を巡る旅は、私にとっては人との出会いの旅であり、感動の旅である。私は、今後も復興の過程を見に定期的に熊本を訪問し、地域の方々と対話・交流することを楽しみにしていきたい。それが私流の熊本復興への支援である。

今後の二毛作目の人生に向けて

この 10 年間は姪浜でのまちづくり活動にどっぷりと浸っていた私であるが、「地域づくりや建築の原点に返る旅」や「熊本の復興の過程を巡る旅」を通して、多くの人と出会い、いろいろなことを感じ、学んでいる。まちづくりに関わる人間は、外の風や空気に触れ、いろいろな地域の方々と対話・交流することが必要だと改めて痛感している。

被災後の熊本城訪問をきっかけに始めた二つの旅は、今までの姪浜でのまちづくり活動を振り返るとともに、今後何らかの形で地域活動や定年後の生活に役立てていきたいという趣旨もある。私がまちづくり協議会を卒業する時に、ある知人が「市役所でのいろいろな経験、そして 10 年にわたる姪浜での地域づくりの経験を活かして、姪浜という狭いフィールドではなく、もっと広いフィールドで活躍してほしい」ということを話してくれた。実践を始めた二つの旅を通して、熊本城の復興と重ね合わせた今後の二毛作目の人生を大いに楽しみたいと考えている。

（2017 年 9 月応募の「第 13 回 JTB 交流文化賞応募作品」に写真追加）

熊本地震をきっかけに始まった筆者の現在の旅は、大きくは「地域づくりや建築の原点に返る旅」「熊本の復興の過程を巡る旅」「身近なまち旅」等に分類される。それぞれの旅について次ページ以降に紹介する。

（２）地域づくりや建築の原点に返る旅

大学時代から「その場所の特性を最大限に活かし、そこでしかできない設計をする」という考え方を徹底的に身に付け始めた筆者は、現在までいろいろな地域や集落、建築物等の訪問を通して、各地域固有の風土や歴史・文化から生まれた歴史的町並みや建造物への興味を持ち続けている。

福岡市役所時代には、シーサイドももち地区の特性を活かした集合住宅「クリスタージュ」、御供所（ごくしょ）地区やシーサイドももち地区の地域個性を活かした「景観形成地区の指定」に取り組み、福岡都市科学研究所（現(公財) 福岡アジア都市研究所）では個性豊かな地域間での交流・連携を目指した「広域連携」の研究等に取り組む他、プライベートでも浮羽町の棚田オーナーになったりしてきた。その根底には、常に「地域の風土・歴史・文化の尊重」ということがある。

地域性豊かな集落景観：エーゲ海に浮かぶイドラ島（左）、ハイデルベルク（右）

歴史的文脈を感じさせるパリのグラン・プロジェの例
（オルセー美術館）

浮羽町（現うきは市）の棚田オーナーの体験
（美しい棚田の風景を守る活動にも一市民として参加）

また、筆者が約 10 年間精力的に活動してきた姪浜においても、「地域に埋もれている身近な魅力資源を掘り起こしていくことが、姪浜ならではの地域特性を活かしたまちづくり・景観づくりの土台となる」ということをまちづくりの哲学としてきた。

わが国の多くの地域で、地域の個性や特性が都市化に埋没して見えにくくなってきている中、地域の人が見慣れて、当たり前だと見過ごしているものにスポットを当てていくことが、その地域ならではのまちづくりを進める上で重要になる。町並みとして連続していなくても、点在する身近な地域資源を発掘し、それを身近なまちづくりの中で活用していくことで、地域の方々にと

っては地域への誇りや愛着につながっていくのである。

筆者が精力的に活動してきた姪浜でのまちづくりの哲学：地域に埋もれている身近な歴史や物語の掘り起こし
興徳寺に伝わる白うさぎ伝説（左）、真根子神社に伝わる武内宿禰（たけしうちのすくね）伝説（右）

こうした経験も踏まえ、筆者は現在、「風景、気候、風土、文化」「町並み、集落、地域、路地、市場」「歴史的建造物、現代建築」「季節、花、樹木、鉄道」「モノ、ヒト、コト（ストーリー）」を大テーマに、それぞれ小テーマを設定し、固有の風土や身近な歴史・文化を活かしたまちづくりを進めている地域や集落、建築物等を訪問している。

テーマに沿った筆者の旅の例（左：佐世保市 展海峰、右：霧島市 霧島町蒸留所）

対象エリアは、九州一円の他、町並み保存の活動や家族旅行等で訪問する国内の諸都市、そしてトピック的には久し振りに訪問したドイツの諸都市も含まれる。基本的には休日を利用しての日帰りの旅が中心であるが、2018 年４月から新しい勤務先での職場環境を活用した旅（ちょこ旅）も加え、多彩なテーマで旅を続けている。2016 年６月～2021 年３月までのテーマと主な訪問地は次のとおりである。

地域づくりや建築の原点に返る旅（テーマ、主な訪問地）

テーマ	主な訪問地
【風景、気候、風土、文化】	
■原風景	信仰風景（小布施町、国東半島）、棚田の風景（うきは市つづら棚田、東峰村竹棚田、豊後高田市田染荘）、漁村風景（福山市鞆の浦、矢部川下流、天草市崎津集落）
■大景観	坂・海・山・空（函館市）、坂・路地・斜面地（尾道市）函館山（函館市）、天寧寺・千光寺（尾道市）
■眺望景観	鏡山（唐津市）、諏訪神社・グラバー園（長崎市）、展海峰（佐世保市）、ローテンブルク
■流域景観	矢部川流域（農山村、市街地、大楠林、漁村）
■海の風景	戸畑～若松、島原～天草、熊本～島原
■港の風景	門司港、長崎港、佐世保港
■造船所のある風景	福岡市、長崎市、佐世保市
■夜景	函館市、長崎市
■気候、風土	有珠山（洞爺湖町）、阿蘇山（阿蘇市）、開聞岳（指宿市）
■異文化	教会群・長崎四福寺（長崎市）、萬松院（対馬市）
■温泉ツーリズム	長湯温泉（竹田市）
【町並み、集落、地域、路地、市場】	
■伝統的町並み（伝統的建造物群保存地区）	川越（川越市）、筑後吉井（うきは市）、八女福島（八女市）、有田内山（有田町）、美々津（日向市）
■ドイツの伝統的町並み	ケルン、ハイデルベルク、ビュルツブルク、ローテンブルク、ガルミッシュパルテンキルヘン
■集落	大川内山（伊万里市）、外海（そとめ）集落（長崎市）、中尾山（波佐見町）、崎津集落（天草市）
■旧街道、宿場町	唐津街道と宿場町、長崎街道と宿場町
■寺町	尾道市、鞆の浦（福山市）、長崎市、中津市
■武家屋敷町	島原市、大村市、知覧町
■歴史的港町	鞆の浦（福山市）、三角西港（宇城市）
■川港と水運	塩田（嬉野市）、川尻・小島（熊本市）
■路地	谷中（台東区）、神楽坂（新宿区）、尾道市
■昔ながらの市場	旦過市場（北九州市）、とんねる横丁・三角市場・戸尾市場（佐世保市）
■まちなか歴史散策	若松（北九州市）、直方市、唐津市、諫早市、大村市、熊本市、中津市、鹿児島市
■思い出のまち・地域再訪	小樽市、函館市、小布施町、つづら棚田（うきは市）、三角西港（宇城市）、ローテンブルク
■思い出の通学路と地域再生	行橋市

地域づくりや建築の原点に返る旅（テーマ、主な訪問地）

テーマ	主な訪問地
【歴史的建造物、現代建築】	
■身近な世界遺産	国立西洋美術館、長崎の教会群、三角西港
■運河	小樽運河
■石橋	眼鏡橋（朝倉市、長崎市、諫早市）、石工の郷（八代市種山）、石橋記念公園（鹿児島市）
■寺社建築	長崎の寺院群、富貴寺（豊後高田市）、宇佐神宮（宇佐市）、霧島神宮（霧島市）
■赤煉瓦建築	金森赤レンガ倉庫（函館市）、東京駅、福岡市赤煉瓦文化館、旧唐津銀行（唐津市）、大分銀行赤レンガ館（大分市）
■わが国の近代化の歩みと建築	開成館（郡山市）、東京駅、和光ビル（銀座）、旧開智学校（松本市）、旧グラバー住宅（長崎市）
■今も息づく蔵	醤油蔵（川越市、熊本市）、味噌蔵（東峰村）、酒蔵（鹿島市、伊万里市）、焼酎蔵（霧島市）
■リノベーション建築	千綿駅周辺のリノベーション建築（東彼杵町）、大分市アートプラザ・大分銀行赤レンガ館（大分市）、マルヤガーデンズ・スターバックス仙厳園店（鹿児島市）、
■現代建築	隈研吾氏設計の建築物（根津美術館、長崎県立美術館、COMICO ART MUSEUM YUFUIN 等）、すみだ北斎美術館、大分県立美術館
■スターバックス建築	川越鐘つき通り店、中目黒店、仙厳園店（鹿児島市）、太宰府天満宮表参道店、門司港駅店
■思い出の建築再訪	磯崎新氏設計の建築物（高崎市、北九州市、大分市）、孤風院（阿蘇市）
■建築展	「日本の家 －1945 年以降の建築と暮らし－」、「国立西洋美術館の図面からたどる思考の軌跡」、「アジール・フロッタン再生展」、「安藤忠雄展 －挑戦－」、「磯崎新の謎」展
【季節、花、樹木、鉄道】	
■歴史的建造物と桜巡り	秋月城址（朝倉市）、熊本城・水前寺成就園（熊本市）
■桜巡り	松浦鉄道浦ノ崎駅（伊万里市）、健軍自衛隊通り（熊本市）、一心行（南阿蘇村）
■新緑巡り	秋月城址（朝倉市）、諫早神社（諫早市）、草千里・米塚（阿蘇市）
■歴史的建造物と紅葉巡り	秋月城址（朝倉市）、熊本城・水前寺成就園（熊本市）、富貴寺（豊後高田市）
■紅葉巡り	太原（たいばる）（広川町）、草千里・米塚（阿蘇市）

地域づくりや建築の原点に返る旅（テーマ、主な訪問地）

テーマ	主な訪問地
【季節、花、樹木、鉄道】	
■花巡り	九州各地（菜の花、紫陽花、ヒマワリ、コスモス）
■歴史的町並みとお雛様巡り	秋月城址（朝倉市）、筑後吉井（うきは市）、八女福島（八女市）、柳町（佐賀市）、有田内山（有田町）
■松原	生の松原（福岡市）、虹の松原（唐津市）
■並木	ケヤキ並木、桜並木、イチョウ並木
■樹木	巨樹、保存樹、被爆樹木
■ローカル線	松浦鉄道、島原鉄道、南阿蘇鉄道
■ローカル線と古い木造駅舎	JR 千綿駅（東彼杵町）、JR網田（おうだ）駅（宇土市）、JR嘉例川（かれいがわ）駅（霧島市）、JR 大隅横川駅（霧島市）
■鉄道ミュージアム	鉄道博物館（さいたま市）、九州鉄道記念館（北九州市）、人吉鉄道ミュージアム（人吉市）
【モノ、ヒト、コト（ストーリー）】	
■鳥の目、虫の目	函館市、長崎市、ローテンブルク
■平和の大切さと巡礼	長崎の教会群
■湾の魅力と広域連携	大村湾
■前向き思考	免の石（南阿蘇村）
■おもてなし（一人一花）	オープンガーデン（小布施町、長野市松代）、障がい者の作品発表会（大分市）
■筆者が定期的に訪問するこだわりのアートギャラリー、書店	アートギャラリーSoubi’56（長崎市）、橙書店（熊本市）、カモシカ書店（大分市）
■筆者が定期的に訪問するこだわりのお店	珈道庵（佐賀市三瀬村）、眼鏡橋周辺の店（長崎市）、大分銀行赤レンガ館（大分市）
■人の生き方への感動	太原（たいばる）のイチョウ並木（広川町）、トタン屋根のケーキ屋ア・ラ・モート（熊本市）、ペンション フライングジープ（南阿蘇村）
■思いがけない発見	鉄道博物館（さいたま市）、赤レンガ塀の町並み（須恵町）、石積み塀の町並み（別府市）
■まちづくり活動を通した思いがけない再会	全国町並みゼミ、熊本城、新町・古町（熊本市）

地域づくりや建築の原点に返る旅【風景、気候、風土、文化】

原風景 ― 信仰風景 ― 浄光寺薬師堂(小布施町)

原風景 ― 棚田の風景 ― つづら棚田(うきは市)

大景観 ― 坂・海・山・空(函館市)

大景観 ― 坂・路地・斜面地(尾道市)

眺望景観 ― 鏡山(唐津市)

眺望景観 ― 展海峰(佐世保市)

流域景観 ― 矢部川下流域(柳川市、みやま市)

海の風景 ― 島原～天草

地域づくりや建築の原点に返る旅【風景、気候、風土、文化】

港の風景 ― 左:長崎港(長崎市)、右:佐世保港(佐世保市)

造船所のある風景 ― 佐世保市

夜景 ― 函館市

気候、風土 ― 左:有珠山(洞爺湖町)、右:開聞岳(指宿市)

異文化 ― 左:崇福寺(長崎市)、右:萬松院(対馬市)

地域づくりや建築の原点に返る旅【町並み、集落、地域、路地、市場】

伝統的町並み ー 左:川越(川越市)、右:有田内山(有田町)

ドイツの伝統的町並み ー 左:ローテンブルク、右:ガルミッシュパルテンキルヘン

集落 ー 左:外海(そとめ)集落(長崎市)、右:﨑津集落(天草市)

旧街道 ー 長崎街道多良海道と宿場町 ー 肥前浜宿(鹿島市)　　寺町 ー 中津市

地域づくりや建築の原点に返る旅【町並み、集落、地域、路地、市場】

武家屋敷町 ― 島原(島原市)

歴史的港町 ― 鞆の浦(福山市)

川港と水運 ― 川尻(熊本市)

路地 ― 尾道市

昔ながらの市場 ― 旦過市場(北九州市)

まちなか歴史散策 ― 若松(北九州市)

思い出のまち・地域再訪 ― 左:栗の小径界隈(小布施町)、右:三角西港(宇城市)

地域づくりや建築の原点に返る旅【歴史的建造物、現代建築】

身近な世界遺産 ― 三角西港(宇城市)

運河 ― 小樽運河

石橋 ― 眼鏡橋(長崎市)

寺社建築 ― 富貴寺(豊後高田市)

赤煉瓦建築 ― 大分銀行赤レンガ館(大分市)

わが国の近代化の歩みと建築 ― 旧開智学校(松本市)

今も息づく蔵 ― 酒蔵(鹿島市)

今も息づく蔵 ― 醤油蔵(熊本市)

地域づくりや建築の原点に返る旅【歴史的建造物、現代建築】

リノベーション建築 ― 千綿駅周辺（東彼杵町）

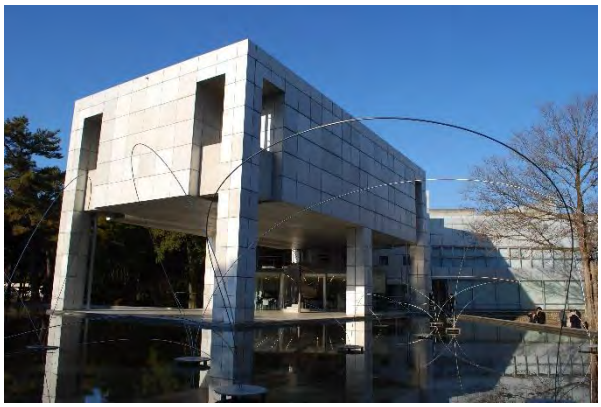
リノベーション建築 ― 大分銀行赤レンガ館（大分市）

現代建築 ― 長崎県立美術館（長崎市）

現代建築 ― 大分県立美術館（大分市）

スターバックス建築 ― 中目黒店（東京都目黒区）

スターバックス建築 ― 仙厳園店（鹿児島市）



思い出の建築再訪 ― 群馬県立美術館（高崎市）

建築展 ―「日本の家－1945年以降の建築と暮らし－展」

地域づくりや建築の原点に返る旅【季節、花、樹木、鉄道】

歴史的建造物と桜巡り ― 熊本城(熊本市)

桜巡り ― 草場川(筑前町)

新緑巡り ― 諫早神社(諫早市)

歴史的建造物と紅葉巡り ― 秋月城址(朝倉市)

紅葉巡り ― 太原(たいばる)のイチョウ(広川町)

花巡り ― 眼鏡橋付近の紫陽花(長崎市)

歴史的町並みとお雛様巡り ― 秋月城址(朝倉市)

歴史的町並みとお雛様巡り ― 筑後吉井(うきは市)

地域づくりや建築の原点に返る旅【季節、花、樹木、鉄道】

松原 ― 虹の松原（唐津市）

並木 ― 表参道のケヤキ並木（東京都渋谷区）

並木 ― 健軍自衛隊の桜並木（熊本市）

樹木 ― 被爆樹木（長崎市）

ローカル線 ― 松浦鉄道（佐賀県、長崎県）

ローカル線 ― 南阿蘇鉄道（南阿蘇村）

鉄道ミュージアム ― 九州鉄道記念館（北九州市）

地域づくりや建築の原点に返る旅【モノ、ヒト、コト（ストーリー）】

鳥の目、虫の目　ー　ローテンブルク

平和の大切さと巡礼　ー　浦上天主堂（長崎市）

湾の魅力と広域連携　ー　大村湾（長崎県）

前向き思考　ー　免の石（南阿蘇村）

地域づくりや建築の原点に返る旅【モノ、ヒト、コト（ストーリー）】

おもてなし（一人一花） ― 左：オープンガーデン（小布施町）、右：ながさき紫陽花祭り（長崎市）

定期的に訪問するこだわりのアートギャラリー、お店 ― 左：Soubi’56（長崎市）、右：眼鏡橋周辺の店舗（長崎市）

人の生き方への感動 ― 左：太原（たいばる）のイチョウ並木（広川町）、右：トタン屋根のケーキ屋ア・ラ・モート（熊本市）

思いがけない発見 ― 石積み塀の町並み（別府市）

まちづくり活動を通した思いがけない再会 ― 熊本城（熊本市）

（３）熊本の復興の過程を巡る旅

前のエッセイ（P42）で紹介したように筆者は、熊本地震前の 2016 年３月下旬～４月上旬に熊本、阿蘇等を旅している。この時に訪問したのは、2000 年から毎年のように通っている南阿蘇村のペンション、阿蘇神社、一心行の桜、免の石、熊本城であり、２回の訪問で阿蘇大橋も４回渡った。その後の４月 14 日と 16 日の震度７の熊本地震で、行った先々の場所が大きな被害を受けた。信じられない光景がテレビに映し出された。筆者は熊本地震当時、福岡市役所で耐震関係の仕事もしていたこともあり、また、大学時代を熊本で過ごしたこともあり、熊本地震はとても考えさせられるものがあった。

熊本城（地震前）

熊本城（地震後）

阿蘇神社（地震前）

阿蘇神社（地震後）

阿蘇大橋の崩落

益城町のアパートの倒壊

次のエッセイは、筆者が第 12 回 JTB 交流文化賞（2016 年）に応募したものである（写真追加）。オオクワガタから始まった南阿蘇村のペンション「ふらいんぐジープ」との縁をきっかけに「熊本地震からの復興へと向かう旅」に舵を取り始めた筆者の気持ちをエッセイにしたものである。

熊本地震と私
～オオクワガタから始まった旅は復興へと向かう旅へ～

熊本地震と虫の知らせ

私にとって、2016 年４月 14 日と 16 日の熊本地震は大きな衝撃だった。私は、2000 年の夏から毎年のように訪問している南阿蘇のペンション「ふらいんぐジープ」に、５月３日の宿泊の予約を入れていた。しかし、用件が入り、４月 14 日の午後９時過ぎにキャンセルの電話を入れた。これが虫の知らせだったのだろうか、熊本で震度７の大地震（前震）が発生したのは、その約 20 分後である。私が住む福岡市西区でも震度３の揺れを観測した。

また、16 日未明に震度７の本震が発生し、甚大な被害をもたらした。震度７の大地震が短期間に連続して起こることは、我々の想定を超えるものである。翌日のテレビでは、阿蘇大橋が崩落したり、熊本城や阿蘇神社が大きな被害を受けた映像が流される。信じられない光景であった。

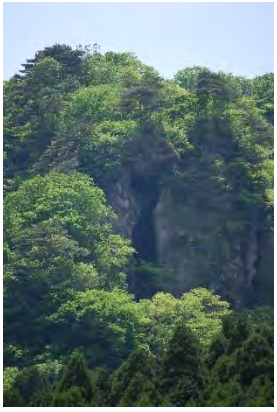
私の頭をよぎったのは、ふらいんぐジープやご家族は大丈夫なのかということであった。電話をしたが、つながらなかった。すぐ近くにある住宅団地や別荘地は、地震による土砂災害で大きな被害を受けており、不安が広がった。無事であることを、ただひたすら祈るばかりであった。

熊本地震で大きな被害を受けた熊本城（左）と阿蘇大橋の崩落現場（右）

実は、私は家内といっしょに、熊本地震の少し前の３月 20 日～21 日と４月２日に、熊本に旅行に出かけた。３月は山鹿の八千代座、さくら湯などに寄った後、阿蘇大橋を渡り、ふらいんぐジープに泊まった。翌日は、阿蘇神社や落ちない巨石で有名なパワースポット「免の石」などを見学した。４月は熊本城の桜や南阿蘇の一心行の桜などを巡る日帰りのバスツアーで、ここでも阿蘇大橋を渡った。２回の熊本旅行で阿蘇大橋を合わせて４回渡ったことになる。

しかし、阿蘇大橋を渡る時に、私には少し不安がよぎっていた。阿蘇大橋の西側にある山が、野焼きの関係かどうかわからないが、はげ山のようになっており、「土砂崩れが起きたら怖いな。」と感じていた。熊本地震でこれが的中し、現実のものとなってしまった。今思えば、これが最初の虫の知らせだったのかもしれない。

また、熊本城、阿蘇神社、免の石など訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。大学時代を熊本で過ごした私のショックは計り知れない。そして、建築物の耐震化の仕事にも従事している私にとっては、『大学時代にお世話になった熊本への恩返しをしよう。建築物の耐震化は重要な仕事である。』と私に伝えているようであった。



熊本地震で大きな被害を受けた阿蘇神社（左）と落石した免の石（中、右）

オオクワガタが取り持つペンションとの縁

さて、ふらいんぐジープの話に戻ろう。私がここを最初に訪問したのは、2000 年の夏である。家内の友人の紹介によるものであり、ふらいんぐジープが実施していたカブトムシツアーに憧れて訪れたものである。当時５歳の長男が昆虫好きで、喜んでくれると思ったからである。

夕食後の午後８時半頃に出発し、クヌギの木や町役場の明かりに集まってくるカブトムシやクワガタを捕まえた。長男や他の子どもたちが喜んだのは言うまでもない。私も童心に返り、久し振りのカブトムシツアーを楽しんだ。ペンションに戻ってからは、捕まえたカブトムシやクワガタを選ぶドラフト会議である。オーナーの進行で楽しく進んでいく。子どもたちの歓声がペンション内に響き渡った。

そして、ふらいんぐジープとのつながりを深くしたのは、帰り際にお土産としていただいた菌糸ビンに入ったオオクワガタの幼虫である。翌年の６月にメスの成虫として羽化した。ちょうど同じ時期に、私の住むマンションの知り合いから羽化したばかりのオスの成虫をいただき、ペアとして飼うことになる。

羽化したばかりのオオクワガタも人間で言えばまだ子どもであり、最初の交尾・産卵は翌年の夏であった。予め埋め込んだクヌギの朽ち木から、卵から孵化したばかりの幼虫を取り出した。15 匹ほどいただろうか。これを１匹ずつ菌糸ビンに入れて育てる。そして、2003 年の夏に成虫として羽化した。ふらいんぐジープのオーナーから幼虫をもらって３年が経っていた。

それ以来、世代交代を繰り返しながら多くのオオクワガタを育ててきた。2014 年に飼育をやめるまで 200 匹近くを羽化させた。ふらいんぐジープには毎年のように訪問していたが、カブトムシの季節である夏に行けない年が３回ほどあった。その時は、ペンションに毎年４～５ペアを送り、宿泊の子どもたちへのプレゼントとして使っていただいた。大変喜んでいただいたそうだ。たった１匹のオオクワガタの幼虫は、多くの成虫を生み出し、子どもたちの喜びにつながり、ペンションとの絆も深めていった。

捕まえたカブトムシやクワガタを選ぶドラフト会議（左）、羽化したばかりのオオクワガタ（右）

ペンション再開とオーナーとの再会

地震後の話に戻ろう。熊本地震発生から 40 日ほど経った５月 27 日にペンションのホームページが更新されていた。そこには、ご家族は無事で、７月９日からペンションを再開されるという嬉しいメッセージが掲載されていた。私も安心して、ペンションに電話し、無事であったこと、そしてペンションが再開されることを喜び合った。

それから、私が長男を連れてペンションを訪れたのは、地震から４ヶ月ほど経過した８月 15 日である。私は建築関係の仕事に従事、長男も建築や都市計画を学ぶ学生であり、ペンションに来る途中、益城町や南阿蘇村の被災現場も見てきた。多くの家屋が倒壊するなど想像以上の被害状況である。道路も至る所で閉鎖されており、なかなかペンションに辿り着かない。よく通り慣れた道に出たと思ったら、そこは何と阿蘇大橋の崩落現場ではないか。すさまじい光景であった。３月と４月に阿蘇大橋を渡る時に、悪い予感がしていた場所である。迂回してようやくペンションに到着し、ご家族との再会とペンションの再開を喜び合う。本当に無事でよかった。

ペンションに向かう途中で見かけた東海大学の学生たちが住んでいた2階建てのアパート。1階が押しつぶされている。

その日の夕食時や夜のケーキタイム時に、オーナーやご家族の地震での苦労話をお聴きし、考えさせられるものがあった。ご家族は地震後、２週間ほど高千穂に避難し、ペンションに戻ってからも車中泊を経験したという。電気も水道も来ない中、一時はペンション経営をやめようかと思った時期もあったらしいが、地震後に今までペンションを訪問した方など約 300 人から心配と激励のメッセージをいただき、それがペンション再開への後押しになったという。中には、大牟

田から毎日、ボランティアとして家の片付けなどの手伝いに来てくれた方もいたそうだ。これもオーナーやご家族の人柄に惹かれてのことであろう。

ふらいんぐジープでは、家具などが倒れたりする被害はあったが、幸いなことに建物の被害は少なかったとのことである。周辺では多くの建物が倒壊したり、土砂災害の被害を受けている中、本当に不幸中の幸いではなかったのだろうか。同じペンション村にあるペンションも比較的被害は少なかったようであるが、電気や水の問題、道路の閉鎖、オーナーの高齢化などもあり、ペンション経営を諦めたところもあると聞いた。

そんな中、約３ヶ月振りの再開である。周りがまだ宿泊客を受け入れる体制が整っていない中での勇気ある決断だったと思う。「夜の明けない朝はない。今できることをしたらいい。」というオーナーの前向きな気持ちがそうさせたのであろう。このペンション村には 15 軒のペンションがあるが、ふらいんぐジープが最初に再開。その後、少しずつ再開するところが出てきているとのことである。オーナーの思いが次第に周辺に広がりつつある。

左：ペンション「ふらいんぐジープ」のオーナーとの会話、右：オーナー夫妻と私の長男（中央が長男）

また、オーナーとの会話で得たものがある。オーナーは、「この 30 年間、ずっと働き続けてきた。今回の３ヶ月間の休みを充電期間として捉え、立ち止まって考えてみた。今までを振り返るいい機会であった。」「自分は現在 58 歳であり、いつまでペンション経営を続けられるかどうかわからないが、皆さんの思いを受けてできるだけ長く続けていきたい。」と話していた。熊本地震を乗り越えての大変前向きな考え方である。

ペンション開設 30 周年となる今年の秋には、外壁の塗り替えや屋根の葺き替えなどのリフォームを考えているという。「大地震というピンチ」を「今後のことを考えるチャンス」と捉え、常に前を向いて取り組んでいくことを応援したい。そして、私は「オオクワガタから始まる縁」を「熊本地震からの復興へと向かう縁」に変えて、今まで以上にオーナーやご家族との交流を深めていきたいと思う。

復興へと向かう旅

ふらいんぐジープのオーナーは、「被害を受けている今の熊本の状況をしっかり目に焼き付けておいてほしい。」とも話していた。宿泊した翌日は、被害の大きかった阿蘇神社にも行ってみた。建物は大きく倒れたままである。５ヶ月前とは違う光景が広がっていた。胸が痛む。

私は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本に出かけている。６月には熊本城、７月には三角西港、８月上旬には天草を訪問。そして、今回は益城町や南阿蘇村、阿蘇市などを訪問した。その中でも、熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋の被害は痛ましい。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖されている。観光客も激減している。

しかし、これを現実と受け止め、未来に向けて、今こそ観光や交流のあり方を考えてみたらどうだろうか。これから長い時間をかけて熊本が復興されていく中で、その過程を見に訪問することも素晴らしい交流ではないだろうか。熊本城の復興には 20 年かかると言われている。これを見届けようではないか。私は現在 58 歳であり、熊本城が復興される頃には 80 歳近くになっている。今後は、熊本城の復興を見届けることを目標に生きていきたいと思う。阿蘇神社の再建にも長い時間を要すると思われるが、その過程も見届けたい。

熊本地震前の熊本城（2015 年5月）

熊本地震前の阿蘇神社（左）と草千里（右）※共に 2016 年3月

折しも８月上旬に、熊本地震前に制作された映画「うつくしいひと」の上映会が福岡市内であった。熊本城、夏目漱石旧居、江津湖、菊池渓谷、草千里、通潤橋といった熊本の名所の地震前の姿が映し出された。こうした名所が、また元の姿に戻るよう願ってやまない。そして、復興の過程を定期的に見に行くことを今後の楽しみにしていきたい。

また、建築や耐震の仕事に加え、精力的に地域のまちづくり活動を推進してきた私にも、熊本の復興に何か役立てることがあるかもしれない。定年を前にして、新たな生きがいと楽しみが増

えたような気がする。ふらいんぐジープのオーナーと同じように、私も前向きに考えることにした。

「南阿蘇のペンション」「オオクワガタ」「熊本地震」というキーワードは、一見すると全くつながらない。しかし、私の中では切っても切れない縁として一貫してつながっている。そして、それは「熊本地震からの復興と観光交流」というテーマにつながっていくことになるのであろう。今後も大地震から復興していく熊本の姿と、南阿蘇のペンション「ふらいんぐジープ」との交流を楽しみに、確実に熊本に出かける機会が増えそうである。私の復興へと向かう旅も始まる。

左：2016 年８月に福岡で上映された映画「うつくしいひと」
右：ペンション「ふらいんぐジープ」のオーナー夫妻と私（2016 年３月、中央が私）

（2016 年　第 12 回 JTB 交流文化賞応募作品に写真追加）

上記のようなこともあり、筆者は、熊本地震後の熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておくため、「熊本地震の脅威の実感」「熊本地震からの復興の過程」「自然の治癒力」をテーマに熊本城、新町・古町、阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村、益城町等を訪問している。2016 年６月～2021 年３月までのテーマと主な訪問地は次のとおりである。

熊本の復興の過程を巡る旅（テーマ、主な訪問地）

テーマ	主な訪問地
■熊本地震の脅威の実感	熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村、益城町
■熊本地震からの復興の過程	熊本城、新町・古町、阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村、益城町
■自然の治癒力	草千里、水前寺成就園

熊本地震の脅威の実感 ― 左:阿蘇大橋の崩落(南阿蘇村)、右:2階建てのアパートの倒壊(益城町)

熊本地震の脅威の実感 ― 左:熊本城の石垣の崩壊(熊本市)、右:阿蘇神社の倒壊(阿蘇市)

熊本地震からの復興の過程 ― 熊本城(熊本市)

熊本地震からの復興の過程 ― 新町・古町(熊本市)

熊本地震からの復興の過程 ー 左：阿蘇大橋崩落現場、右：黒川地区の復興イベント（ともに南阿蘇村）

熊本地震からの復興の過程 ー 左：阿蘇神社（阿蘇市）、右：益城町の復興状況

自然の治癒力 ー 草千里（阿蘇市）

自然の治癒力 ー 左：米塚（阿蘇市）、右：水前寺成就園（熊本市）

（４）身近なまち旅

①身近な「職・住・遊・活」の場である博多湾姪浜エリア

筆者の身近な「職・住・遊・活」の場である博多湾姪浜エリア（シーサイドももち～愛宕・愛宕浜・姪浜・生の松原～能古島～博多湾）を対象に、「眺望」「景観」「回遊」「歴史」「自然（海・山・松原）」「健康」「広域連携」「観光」「フットパス」等をテーマにまち歩きを実践している。

■職：福岡市役所時代の思い出のフィールド

・シーサイドももち住宅地開発（シーサイドももちクリスタージュ）

・シーサイドももち地区都市景観形成地区の指定

筆者の職のエリア（シーサイドももち）：クリスタージュ（左）、愛宕神社から見たシーサイドももち（右）

■住：姪浜～愛宕浜居住歴 34 年

・1987 年から姪浜校区や愛宕浜校区に居住

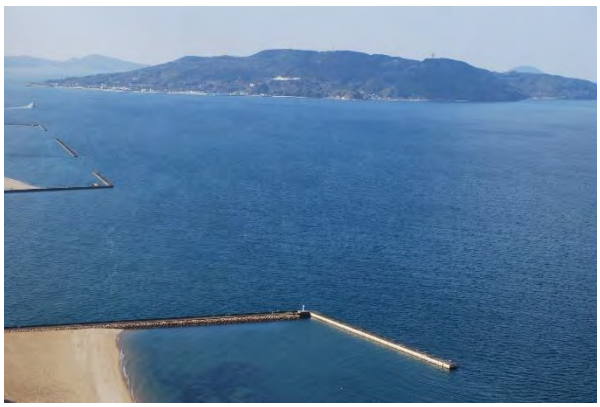
■遊：身近なレクリエーションエリア

・シーサイドももち、愛宕神社、室見川、愛宕浜海浜公園、生の松原、能古島、博多湾

■活：身近なまちづくり活動エリア

・旧唐津街道を中心とした姪北校区

・広域的には姪北校区を中心とした姪浜エリア（姪北校区、姪浜校区、内浜校区、愛宕校区、愛宕浜校区）



筆者の住・遊・活のエリア：広域的な姪浜エリア（左）、博多湾と能古島（右）

②憩いの空間、現在の職場周辺

筆者の憩いの空間である大濠公園、舞鶴公園、福岡市役所時代の思い出のフィールドである御供所（ごくしょ）地区を中心とした博多部、現在の職場周辺である薬院、今泉、六本松、鳥飼等を散策し、身近な風景や空間を楽しんでいる。

筆者の憩いの空間：大濠公園（左）、舞鶴公園（右）

福岡市役所時代の思い出のフィールド：御供所地区　承天寺（左）、博多祇園山笠　追い山ならし（右）

筆者の身近なまち旅は、その場所に行くだけでなく、通勤途中のバスからの車窓景観や季節感を感じさせる樹木や花々、ちょっとした雨宿りの空間等も対象となる。2016 年 6 月～2021 年 3 月までのテーマと主な訪問地は次のとおりである。

身近なまち旅（テーマ、主な訪問地）

テーマ	主な訪問地
■筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア）	シーサイドももち、愛宕、豊浜、愛宕浜、姪浜、小戸、生の松原、能古島
■筆者の憩いの空間	大濠公園、舞鶴公園
■筆者の福岡市役所時代の思い出のフィールド	御供所（ごくしょ）地区を中心とした博多部
■筆者の現在の職場周辺の身近な空間	薬院、今泉、浄水通り、六本松、鳥飼

筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 博多湾

筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 百道浜

筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 愛宕（左：愛宕神社、右：観音寺）

筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 豊浜（左：室見川、右：枝垂れ梅）

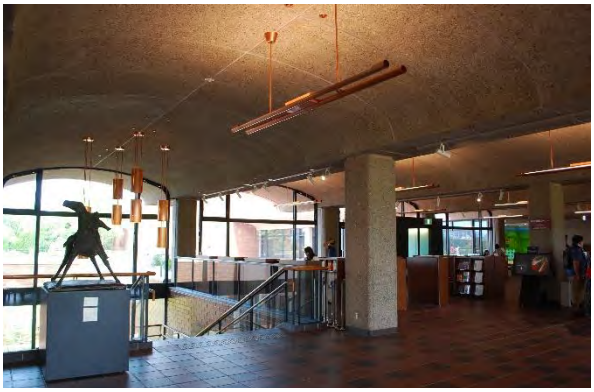
筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 愛宕浜（左：愛宕浜海浜公園、右：ケヤキ並木）

筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 姪浜（左：住吉神社、右：3軒続きの町家）

筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 小戸・生の松原（左：小戸の海岸、右：生の松原元寇防塁）

筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 能古島（左：能古島アイランドパーク、右：思索の森）

筆者の憩いの空間 ― 左:大濠公園、右:大濠公園内の福岡市美術館



筆者の憩いの空間 ― 左:福岡市美術館、右:舞鶴公園(チームラボ光の祭)

筆者の憩いの空間 ― 舞鶴公園

筆者の福岡市役所時代の思い出のフィールド ― 御供所(ごくしょ)地区(左:聖福寺、右:承天寺)

筆者の現在の職場周辺の身近な空間 ― 薬院周辺（左：高層ビルの足元のケヤキ並木、右：小烏神社）

筆者の現在の職場周辺の身近な空間 ― 今泉周辺（左：若宮神社、右：店舗）

筆者の現在の職場周辺の身近な空間 ― 六本松周辺（左：蔦屋書店、右：西日本シティ銀行本店ココロ館）

（５）「アート」「歴史」「旅」「生き方」等をテーマにした旅

筆者は、今まで説明してきた旅の他、書籍や新聞、テレビ等で得た情報を基に「アート」「歴史」「旅」「生き方」「哲学」等をテーマに小さなまち旅を実践している。旬な情報を基に旅をし、いろいろな方々にお会いすることで、筆者の旅もより充実したものとなっている。

2020 年５月に発行された『還暦からの底力　歴史・人・旅に学ぶ生き方』（出口治明著）の中に「たくさんの人に会い、たくさん本を読み、いろいろなところに出かけていって刺激を受ける、つまり、‘飯・風呂・寝る’の低学歴社会から‘人・本・旅’の高学歴社会へと切り替えなければならないのです。」と記されているが、筆者は正しくこれを実践しているのかもしれない。

新聞情報とそれを基に実践した「小さなまち旅」の一例を次に示す。

本屋探見

橙書店

@熊本市

コーヒーの香り 心通わす ひとときはじまり。8年前、熊本地震で被災したのを機に、一つにまとめて移転した。

翻訳小説や文書を中心に約2千冊。取次会社を通さず、田尻さん自身が選び買い取って仕入れる「返本できると、私の場合、本選び甘えが出そうなので」

カフェスペースのカウンターで一服しながら、おすすめの本をたずねる人も。「熊本旅行の間に読めるもの」「親の介護の愚痴聞いてあげるもの」。田尻さんは少し考えて、すぐそばの本棚から一押しの一冊を差し出す。

「私もお客さんから教えてもらいます。お客さん同士、好きな本の話で盛り上がることもありますね」

くつろいだ雰囲気の店内で、詩人の伊藤比呂美さんが朗読会を開き、風想史家の渡辺京二さんが講演することも。作家で建築家の坂口恭平さんは、書斎がわりに原稿を書きに来る。

田尻さんは言う。「経営はいつもぎりぎり。すべての人の好みに対応できる書店ではありませんが、扉を開けて入って来てくれる幾人かの心に響けばと思って続けています」（上原佳久）

カフェスペースで常連客と談笑する田尻久子さん（右）＝熊本市中央区

初めて入る時は、ちょっとためらうかもしれない。熊本市の中心部にある古い雑居ビル。階段は何だか薄暗い。でも、2階にある扉を開けると、コーヒーの香りがふわり。暖かな色合いのあかりに照らされて、木製の本棚が並んでいる。

橙書店。別名は、カフェ「オレンジ」。店主の田尻久子さん（50）が2008年、元々経営していたカフェの隣に書店を開いたのが

売れ筋

●『みぎわに立って』田尻久子著（亀山社）　橙書店の店主によるエッセー集。個性的なお客さんに加えて猫や蛾までやって来る。そんな日常を柔らかな筆致でつづる。

●『苦海浄土』石牟礼道子著（藤原社文庫）　生の尊厳を求める水俣病患者を描いた名著。「石牟礼ファンのお客さんは多いです」と田尻さん。

熊本市中央区練兵町54松田ビル2階。☎096・355・1276。午前11時半～午後8時（日曜は午後5時まで）。火曜休み。

熊本の橙書店に関する記事（2019.5.27 朝日新聞）

「被爆十字架」の返還式が行われ、ウィルミントン大学平和資料センターのターニャ・マウス所長（右）から、高見三明・カトリック長崎大司教（中央）と信徒代表の藤田千歳さんに渡された＝7日午後、長崎市のカトリック浦上教会、小宮路勝撮影

被爆十字架 長崎に帰る　米国から

2019.8.8 朝日

米国による原爆投下で崩壊した長崎市の浦上天主堂のがれきの中で見つかり、米国で保管されていた「被爆十字架」が7日、被爆から74年を経て浦上教会に返還された。十字架を手にしたカトリック長崎大司教区の高見三明大司教（73）は「人間の残忍さを訴えると同時に、希望を与えてくれる。生きていてくれてよかった。被爆者はじくなっても、揺るがぬ原爆の証人になってくれる」と話した。

▼32面＝「原爆作った愚かさ伝える」

浦上教会などによると、十字架は1930年代半ばから旧天主堂内にあった。45年秋から長崎に駐留し、当時の山口愛次郎司教（故人）と親交を結んだ米海兵隊員のウォルター・フークさん（2010年死去）が譲り受けたとされる。82年、米ウィルミントン大学平和資料センターに寄贈された。十字架を返還したセンターのターニャ・マウス所長は「この十字架は核兵器を保有する米国と各国政府にその使用をやめるよう促している。浦上に返還することで、新たな意味が見いだされるだろう」と話した。（榎本瑞希、田井中雅人）

浦上天主堂と被爆十字架に関する記事
（2019.8.8 朝日新聞）

記事を基に橙書店を訪問（2019.7.5）

記事を基に改めて浦上天主堂を訪問（2019.8.9）

（令和元年）12月2日（月）　朝日新聞（夕刊）

隠れ家の先 長崎愛した版画

木版画家・田川憲の作品展示室

築70年のビルの一室　孫夫婦、魅力伝える

異国情緒あふれる長崎の街並みを愛し、描き続けた長崎の木版画家、田川憲（1906～67）の作品を集めた展示室が、長崎市出島町にできた。築70年ほどの古びたビルの一室で、その魅力を孫夫婦が静かに伝えている。（田中瞳子）

戦後まもなく建ったコンクリート打ちっ放しのビル。ちょうつがいで留められた色あせた扉を開くと、1階の通路の壁には「そうび」とかかれた木製の看板がひとつ。隠れ家のような一室に出合う。

田川の孫の俊さん（49）と妻でオーナーの由紀さん（48）が昨年1月に開いたアートルームだ。店の名「Soubi, 56」は、田川が1956年に描いた作品「十字薔薇の窓」から。大浦天主堂の側面のステンドグラスを描いたこの作品の雰囲気とタイトルの響きにひかれた。展示するのは田川の作品や関連する手記で、テーマと作品は2カ月に1度替えている。

田川は長崎市で生まれ、東京や大分、上海などでの生活を経て終戦後に帰郷した。生涯にわたって居留地の洋館や石畳、唐寺など長崎の街並みをモチーフに多くの木版画を残した。

包装紙やお菓子の箱などさまざまなお店のパッケージデザインも手がけている。長崎では日常的に目にする機会が多かったが、没後52年たち、生前を知るファンも高齢化した。俊さんは、祖父の作品をまちで見かけたり、語られたりする機会が減っていると感じるようになった。「常に祖父の版画を見られる場所をつくろう」と思い立った。

「50年以上前につくられた作品だから、少しでも年季のあるところで展示したほうが自然なのでは」。そんな思いで空き部屋を探し、田川が多くの作品を描いた「出島エリア」で、この古びたビルと出合った。

外観からはそこに展示室があるようには見えず、迷ってしまうお客さんもいる。一方で、古いビルのたたずまいにひかれて偶然入ってきて、田川のファンになってくれた人たちもたくさんいた。「芸術とはもっと身近なものだ」と書き残した祖父の思いを受け継ぎ、俊さんは「原画を間近で見て、芸術作品を身近に感じてもらいたい」と願う。由紀さんは「地元の人には『あたりまえ』になっている長崎のよさ、おもしろさに気づき、語ってもらえる場になれば」と話している。

田川の孫、俊さんは「長崎の『あたりまえの風景』を多く残してきた祖父の作品も、この本を読んでから見るとまた違って見える。新たな発見を楽しめる小説です」と話した。

税抜き1800円。問い合わせは左右社（03・3486・6583）へ。

上 銘菓「南蛮おるごおる」のパッケージになっている田川憲の版画
下 孫の田川俊さん（左）とオーナーの由紀さん

田川憲と棟方志功　2人を描いた小説出版

川憲と青森出身の棟方志功、東西の2版画家を描いた小説「心を彫る」が8出版された。著者は、東京・渋谷にあ小劇場「ジァン・ジァン」の元劇場主の高嶋進さん（87）＝山梨県北杜市。文学のイメージを版画におこした2人の共通点を描いている。

金子光晴の詩を連作版画「十字架鮫（さめ）」に表現した田川と、ドイツの哲学者・ニーチェの「ツァラトゥストラはかく語りき」を板に彫り込んだ棟方。2人の共通点に着目した高嶋さんは「本や新聞が読まれなくなり言葉にこだわらなくなった現代に、言葉に命をかけて死んでいった2人の芸術家をのこしたいと思った」と話す。

田川憲アートギャラリーSoubi’56 に関する記事（2019.12.2 朝日新聞）

左：記事を基に田川憲アートギャラリーSoubi’56 を訪問（2019.12.6）
右：2018 年に長崎県立美術館で開催された「長崎の美術　田川憲展」の図録

田川憲氏の作品を基に改めて崇福寺や眼鏡橋を訪問（2019.12.20～）

また、「小さなまち旅」に関して、筆者が影響を受けた書籍や映画は下表のとおりである。この中でも、特に小説家・原田マハ氏の本に関心があり、興味を持って読んでいる。筆者が最初に読んだ彼女の本は、国立西洋美術館誕生に隠された奇跡の物語「美しき愚かものたちのタブロー」であり、ちょうど国立西洋美術館開館 60 周年記念「松方コレクション展」を見た頃であった（2019 年６月）。この本を読んで以来、すっかり彼女のファンになっている。彼女の作品はアート小説が中心であるが、歴史や旅、生き方等の面でも参考になることが多い。

そして、筆者の主要な旅の一つである「熊本の復興の過程を巡る旅」の参考になるのが、熊本地震前に制作された映画「うつくしいひと」である。2016 年８月上旬、その映画の上映会が福岡市内であり、熊本城、夏目漱石旧居、江津湖、菊池渓谷、草千里、通潤橋といった熊本の名所の地震前の姿が映し出された。筆者はこうした名所がまた元の姿に戻るよう願わずにはいられなかった。と同時に、これから長い時間をかけて進められていく復興の過程を見に定期的に熊本を訪問することとし、実践を続けている。

「アート」「歴史」「旅」「生き方」等をテーマにした旅（テーマ、主な書籍）

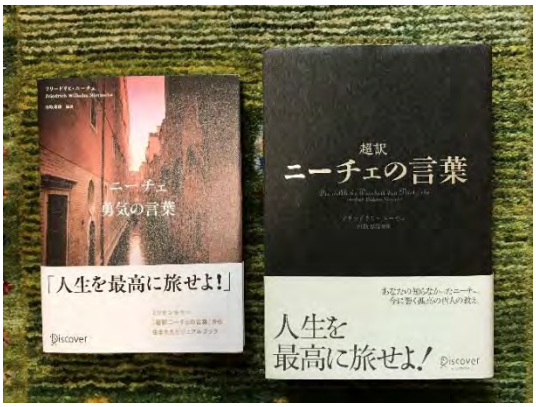
テーマ	主な書籍、映画
【マスコミ情報】	
■アート、歴史、旅、生き方	熊本の橙書店に関する記事 浦上天主堂と被爆十字架に関する記事 田川憲アートルーム Soubi’56 に関する記事
【書　籍】	
■アート、歴史、旅、生き方	「風神雷神 Juppiter, Aeolus（上、下）」「美しき愚かものたちのタブロー」「たゆたえども沈まず」「フーテンのマハ」「旅屋おかえり」「さいはての彼女」(以上、原田マハ 著)
■アート、町並み	「長崎の美術６ 田川憲展 図録」
■旅	「還暦からの底力　歴史・人・旅に学ぶ生き方（出口治明著）」 「旅のつばくろ(沢木耕太郎 著)」 「曙光を旅する(葉室麟 著)」 「るろうにほん 熊本へ(佐藤健 著)」 「懐かしい笑顔に会える、九州の小さな町へ(旅 2012 年 3 月号)」 「建築への旅 建築からの旅(ｴｰﾃﾞｨｰｴｰ･ｴﾃﾞｨﾀ･ﾄｰｷｮｰ)」
■哲学	「ニーチェの言葉 人生を最高に旅せよ」
【映　画】	
■熊本地震からの復興	「うつくしいひと」「うつくしいひと サバ？」
■生き方、環境	「人生フルーツ」

その他（アート、歴史、旅、生き方、哲学等）

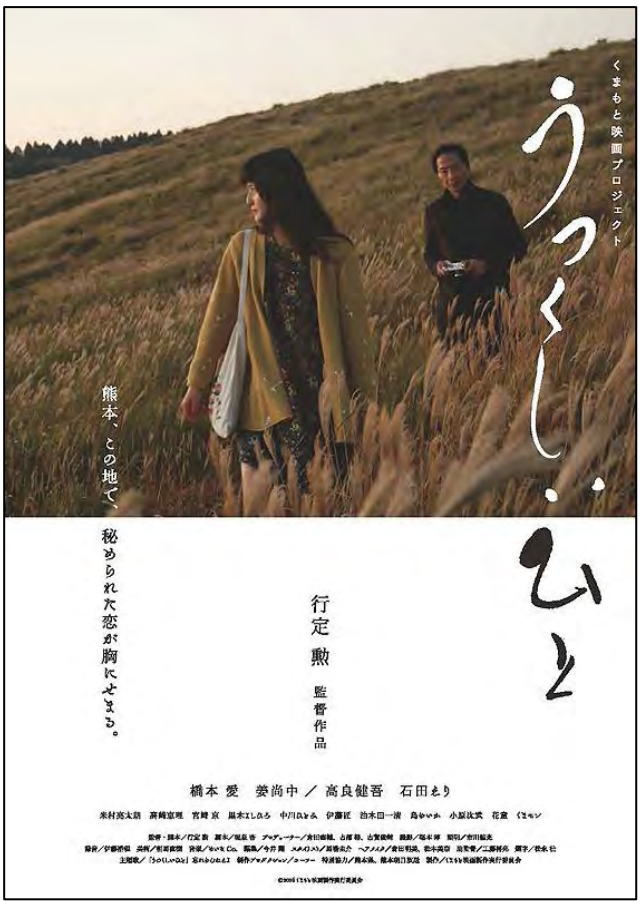
アート、歴史、旅、生き方 ― 原田マハ氏の小説

アート、町並み ― 田川憲氏の作品

旅 ― 左：沢木耕太郎 著「旅のつばくろ」
右：葉室麟 著「曙光を旅する」



哲学 ― ニーチェの言葉 人生を最高に旅せよ



熊本地震からの復興 ― 映画「うつくしいひと」